神々に反旗を

南　歳三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神々に反旗を

【Ｎコード】
Ｎ３７７４Ｈ

【作者名】
南　歳三

【あらすじ】
その時青年は神々に反旗をひるがえした。「人は人として生きなければならない。たとえ神々に逆らっても。」終末医療のホスピスでの青年医師の苦闘の日々を書いてます。

第1話　ホスピス（前書き）

作者は医療関係者じゃ無いので、文中に不適切な表現があると思います。だからあれば指摘をお願いします。指摘箇所を訂正しますので

第1話　ホスピス

窓の外はまるで別世界のようだ。私はかつてその世界に居たことがある。しかしもうその世界には戻れない。
そう、ここはホスピス。

聖マリアンヌ病院第一集会場

「みなさん、佐々木さんは昨日無事に天国に向かわれました。皆さんも天国に行けるよう神様にお祈りしましょう」
聖マリアンヌ教会修道長立花の号令で集会場に集まった患者達は、全員目を瞑り、天国に行けるよう神に祈った。

聖マリアンヌ病院第一内科

「おい、鈴木は第１４病棟に配属だとよ」
「あそこは医者にとって島流しみたいなものだよな」
「そうそう、ホスピスは“敗北の医学”だからあそこは負け犬の医者が行くとこだよ」
内科の若い医師達が集まって今度の人事の噂話をしていた。
そのホスピスに行くことになった鈴木は、単なる異動だと上司に説明され、何も考えずに移動の為の荷造りをしていた。
鈴木からしてみれば、終末医療とはいえ医師として患者の治療に当たるだけだから、何も考えることなどなかった。

聖マリアンヌ病院第１４病棟ナースステーション

ナースステーションに到着した鈴木は、看護師長の武田に挨拶し

た。武田は鈴木が挨拶にきたにもかかわらず、
軽く会釈して、看護師達に次々と指示を出していた。普通なら看護師長は配属された医師に患者のカルテを見せながら、入院している患者達の状態を鈴木に教えて、治療方針を個別に仰ぐはずだった。その武田の態度を変に思いながら、看護師達は忙しいのだからと鈴木は勝手に解釈し、自分で勝手に患者達のカルテを探して見だした。
「な、なんだこれは！」
鈴木はある患者のカルテを見て驚いた。その声を聞いて看護師達はあわてて鈴木の方を見た。鈴木は次々とページをめくり、めくり終えると別の患者のカルテを取って開いた。そしてまたカルテを次々とめくり出した。その鈴木の行動を変に思った看護師の高橋が
「先生、どうされました？」
と鈴木に声を掛けた。しかし鈴木はカルテを調べる行動をやめない。高橋はどうしようもなくただ鈴木がカルテを見終わるのを待った。鈴木がカルテを閉じ、鬼の形相で高橋を見て
「何でここの患者達はがんの治療をしないんだ！モルヒネってただの麻酔じゃないか！！何で治療しないんだ！」
と高橋に向って怒鳴った。鈴木に怒鳴られて高橋は困惑しながら
「ホスピスだからです。苦しまないようにケアするのがホスピスです」
と説明した。
「治療しなきゃ死んでしまうだろ！モルヒネなんか何本打っても意味が無い！」
と鈴木はそれでも声を高らかに高橋を責める。高橋も好きでそんなことをやってないと
「治療しても治らないからです！ホスピスはそんな患者さんしかいません！！」
と心から激しく叫んだ。そこまで言われると鈴木は何も言えなかっ

た。高橋の言うとおりここはホスピスである。鈴木は
死刑宣告のような事をホスピスでケアされている患者達のように、
厳しい現実として受け入れるしかなかった。

第2話　現実

鈴木は、医者としてホスピスがどんな場所か知っていた。確かに治療しても治らない、もう手遅れの患者達を集めた病棟だと知っている。しかし、病院は常に患者の為に最善を尽くす場所であり、医師は患者の為に全力を尽くすべきだと思っているから、カルテの記述には激しく憤慨した。だが、治らないのならば、患者にとって治療は最善ではなく、苦しまずに死ぬことだった。医師は薬の副作用で患者を苦しめないのが医師の義務だった。

聖マリアンヌ病院はキリスト系の病院として、患者の苦痛を和らげることを第一としていた。ホスピスも患者の苦痛を和らげるために設けられ、他病院からも末期がん患者を受け入れるなどして、キリスト教的博愛を実践していた。キリスト教徒ではない鈴木は、そのような博愛精神は持ってないから、苦痛より治療のことを考え、副作用による患者の苦しみを軽視していた。だから前任者の薬を患者に与えない治療をすぐには理解できなかった。

少しずつホスピスを理解し出した鈴木はもう怒ろうとせずに改めてカルテを見だした。看護師達も鈴木の相手をしている余裕など無いから、本来の業務に戻り出した。鈴木はカルテだけではもの足りず前任者の業務日誌も読みだした。鈴木の前任の内科医は、ただ淡々に日誌を書いて記述を終わらせていた。薬を患者に投与しないのなら、内科医は存在意義がなく、日誌に書

くようなことはほとんどなかった。
ただ内科医は、患者を診て麻酔を打つか打たないかの判断をしているだけだった。

「君が新任者か？」

そう聞かれて鈴木は顔を上げた。質問してきたのはこの病棟の麻酔科医の坂本だった。坂本は鈴木より
１０歳ほど年上で、普段は手術用の麻酔などを打っていた。鈴木は坂本の顔を見るなり

「治療しないのなら、医師は何でここにいるのでしょうか？」

と嘆くように聞いた。

「おいおい、それは君の仕事であって、僕は麻酔を打ちにここに来ているだけだよ。」

「それに治療したいなら治療すればいいのじゃないか？」

と坂本は他人事のように鈴木に答えた。医師の立場として、ここでは内科の鈴木の判断で治療が行われ
る。坂本の方が年上だが、鈴木の指示で坂本は麻酔を打つことになる。それで坂本は、患者の治療に関
しては他人事のような感覚だった。坂本に言われて鈴木も治療を考えたが、抗がん剤が患者に与える苦
しみを考えたら、治療に踏み切ることが出来なかった。

「ここの患者さんは幸せだよ、痛みさえなくなれば、自然に意識を無くして苦しまなく死ねるからな。」

と坂本の言葉が、鈴木への免罪符のように心に響いた。

第3話　無力の内科医

鈴木は坂本が去った後、再び不十分な引き継ぎを補うべく患者達のカルテと看護記録を見て、患者達の状態を確認し始めた。

「鈴木先生、佐藤さんの退院の件ですが、このまま退院させてよろしいでしょうか？」

と一人の看護師が鈴木に聞いてきた。鈴木は退院と聞いて小躍りした。患者全員が死ぬわけではなく、治る人もいるのだと思い、少しずつ希望が湧いてきた。

「退院って、治療の続きは通院で行うなら、すぐにでも退院の手続きを取ってもいいですよ。」

と看護師に鈴木が答えた。看護師は悲しそうな感じで

「退院は最期を自宅で迎えたいからです。」

と答えた。それを聞いて鈴木は奈落の底に落とされたようなショックを受けた。結局誰も治らないということである。鈴木はわずかな希望まで奪い取られた感じで、何も言えなかった。看護師は鈴木の心の回復など待っていられない。すぐに

「佐藤さんは退院でよろしいですね？」

と鈴木に念を押すように聞いた。

「あぁっ。」

ただ返事をするように鈴木は答え、看護師は佐藤さんの退院の手続きを取ることにした。手続きを終えると鈴木はあわてて佐藤のカルテを見た。食道ガンで全身に転移し、もはや回復の見込みがなかった。

そして余命までの月が書かれていて、その余命を宣告された日付けから数えて今日は一ヶ月も無かった。

医師として何もする事が出来ず、ただ前任者の指示を引き継ぐだけの自分自身に怒りといらだちを覚えながら鈴木は佐藤が退院するのを黙って見ているだけだった。

ナースステーションにナースコールが鳴った。３１４号室からだった。すぐさまナースが３１４号室に駆けつけ、しばらくしてナースに鈴木が呼ばれて、鈴木も３１４号室に向かった。そして病室に入ると男性患者が背中に痛みを訴えていた。鈴木はその患者さんに症状を聞き、治療を考えたが、医者として出来ることは痛み止めの注射を打つことだけだった。当然、麻酔科の坂本を呼び、鈴木の医者としての仕事はそれで終わったようなものだった。

第４話　形式的な回診

鈴木はナースステーションに戻り、再び患者達のカルテと看護の記録を読んだ。病名は各自違っていても、治療は麻酔だけの延命治療には変わりなく、違うのは麻酔の量ぐらいなものである。その麻酔の量も鈴木にはさほど関係ある物ではないから、ただ知っておくだけのことだけにしかならなかった。

昼になり、看護師達があわただしく患者達に食事を配膳するのをよそに、鈴木は食事を取ることにした。

食べながら鈴木は医者なのに医者らしいことを出来ない場所に移されたという思いで、倦怠感が漂っていた。医師として意欲を持とうにも、医師らしいことが出来ないのだから、どうしようもなかった。しかし、病棟は医師としての鈴木を必要としている以上、鈴木はホスピスで医師として居なければならなかった。

「鈴木先生，回診の時間です。」

神田看護副師長が鈴木に回診の時間だと伝えた。鈴木はあわてて返事をして回診の準備をした。

「行きましょうか。」

鈴木は神田にそう言って二人は回診で病室を回り出した。

最初の病室に二人は入った。患者達は回診の時間だからと各自自分のベットに待機していた。患者達は迫り来る死に怯えてやる気の無い生活を送っている人もいれば、残りの人生を有意義に過ごそうと考える人も居た。鈴木は最初にその前者の人に当たった。

「調子はどうですか？」

一人目の患者に鈴木はそう聞いた。鈴木からしてみれば普段から医師として患者に使う言葉であり、別に違和感は無かった。しかし患者は末期がんでもうじき死ぬ運命と分かっているから、体の調子とかは逆に皮肉に聞こえたりする。

「先生、私はいつ死ぬのでしょうか？」

６０代の男性患者は、忘れていたい体のことを思い出ささされ、とっさに一番気になることを聞いた。その問いは鈴木の口を止めるには十分な質問だった。鈴木はこの患者の為に言える言葉など思いつかない。その間を補うように神田が

「坂口さん、何言ってるんですか、死ぬなんて考えなくてもっと人生を楽しむことを考えましょうよ。神様も天国から坂口さんを温かく見守ってくれてるのだから、安心して人生を楽しみましょうよ。」

と言って坂口の心の不安を取り除こうとした。そしてしばらく二人で会話して、鈴木は何も語れなかった。会話が終わると神田は鈴木を廊下に戻して

「鈴木先生、患者さんはただでさえ不安な状態なんだから、医療的な話をしないでください。」

と鈴木に患者に病状の話をしないように釘を刺した。鈴木は医療説明は医者としての義務だからと拒否したかったが、立場的に神田の方が偉い以上、反論はしなかった。

「とにかく患者さんの相手は私がしますから、先生は私のそばにいるだけにしてください。」

と神田が鈴木に指示をした。鈴木は医師として屈辱的な命令だが仕方なく受け入れた。こうして鈴木にとって無意味な回診は患者全員を回ることによって終了した。

時間が経ち、看護師達は日勤から準夜勤のメンバーに引き継ぎされ交代していった。鈴木は交代の医師が居ないとはいえ帰るのは自由だった。しかし、すべての現状を場握しているわけではないから、自主的に鈴木は帰るのを遅らせた。

消灯時間になり、鈴木もいい加減帰ることにした。そんな時に看護師達があわただしく動き始めた。その看護師達の動きが気になって、鈴木は看護師達の後を追った。看護師達は３２１号室に入って行った。鈴木も３２１号室に後を追って入った。そこで看護師は一人の女性患者を慰めていた。

「あ、鈴木先生からも田中さんに言ってください。」

突然、看護師にそんなことを言われて鈴木は戸惑った。先の回診で鈴木は田中と顔を合わせたが何も会話をしていないから、何が何だかわからなかった。

第5話　治療の決断

「どうされました？」

鈴木は医師として患者に田中に問うた。

「死にたくない。」

田中はそう訴える。

「えっ。」

鈴木は予想外の訴えに思わず戸惑った。

「死にたくない、死にたくない、死にたくない。」

田中は涙を流しながらそう訴える。それを聞いて鈴木は何も言えなかった。代わりに看護師達が

「田中さん、そういっても人間みんな死ぬのですよ。死ぬのは田中さんだけでは無いです。」

と田中をなだめようとした。しかしそんな慰めは田中には通用しない。田中は看護師達の説得を聞き入れず死にたくないを繰り返すのみだった。そんな中、医師としてまだ未熟な鈴木は慰めの言葉も思いつかずに、苦しみ続け、ただ一つしか思い浮かばない選択肢を選んだ。

「田中さん、治療しましょう。治療すれば死ななくて済みます。」

「ほんとですか？」

田中は鈴木の提案を激しく喜んだ。その鈴木の提案に看護師達が驚き何も言えない中、鈴木は田中に

「今日はもう遅いからもう寝ましょう。治療は明日からです。」

と伝えた。

「はい。」

と田中は返事して泣きやんだ。この場はこれで収まり鈴木と看護師はナースステーションに戻ることにした。

ナースステーションに戻り、看護師の一人が開口一番

「さすが鈴木先生、あれなら田中さんも聞いてくれます。嘘も方便ですね。」

と鈴木が治療すると嘘のつもりで言ったと思い、その判断を称賛した。しかし鈴木は

「いや、明日から本格的に田中さんを治療する。これ以上、患者さんをほっとくわけにはいかない。」

と田中を明日から治療すると看護師に言った。

「先生、ここは緩和ケア病棟です。治療をするところでは無いです。」

と別の看護師が鈴木の判断に否定的に声を掛けた。

「そんなことは関係ない、患者さんが治療を受けたい以上、受けさせるのが病院だ！」

と鈴木がその看護師に訴えた。看護師達はこれ以上鈴木に何も言えず、明日の昼勤の看護師達にそのことを取次ぎ、看護師長に判断してもらうことにした。そして鈴木は改めて田中のカルテを見た。

田中敏子（４２歳）

３年前に乳がんになり、左乳房を切除、２年後に再発。がん細胞がリンパ節に転移し、ステージは３期に到達，完治の見込み無し。

と書いてあった。鈴木は外科的治療は無理と判断し、抗がん剤と放射線治療で田中を治すことにした。

「明日、田中さんにフコイダンを投与と放射線治療の予約を取ってくれないか。」

と鈴木は看護師達に指示をした。しかし看護師は

「先生、ここは緩和ケア病棟ですから、抗がん剤は無いです。どうしても必要なら内科部長を通さないと駄目です。」

と答えた。聖マリアンヌ病院は薬を厳重に管理していて、病棟ごとに使える薬の種類が決まっており、他の薬を使うときはその薬を管理している責任者に認可を取らなければならなかった。この場合、抗がん剤は内科の担当だから、使うならば内科部長に認可を取らなければならなかった。当然看護師が申請出来る立場で無いから鈴木

自身が内科部長に話をしなければならなかった。

「高坂部長か。」

鈴木は内科の高坂部長とは確執が無かったが、鈴木は役職的に平社員の立場だから、申請には少しためらいがあった。しかし、田中の為にはそんなことは言ってられない、鈴木は明日、高坂に話をすることにした。

第6話　薬物使用の認可を得る

次の日の朝、鈴木は緩和ケア病棟のナースステーションに入るなり、内科部長室に電話した。

「高坂だが。」

「緩和ケア病棟の勤務医の鈴木ですが、患者さんに抗がん剤を使いたいと思いまして、部長に認可を貰う為に電話しました。」

「抗がん剤？緩和ケアに使う為か？」

「いいえ、治療の為です。」

「治療？電話じゃよくわからんからとりあえず部長室に来てくれ。」

「わかりました。」

鈴木は電話を切ると、すぐに内科部長室に向かった。その間、出勤してきた緩和ケア病棟の武田看護師長は夜勤の看護師達から、鈴木が田中を治療すると決めたことを聞いて驚いていた。

鈴木は内科部長室の前に来るとドアをノックして

「鈴木です、入ります。」

と言ってドアを開けた。高坂は鈴木を見て

「治療ってどういうことだ？」

と鈴木に聞いた。鈴木はその問いに

「乳がんの末期がんの患者さんに使います。」

と答えた。それを聞いて高坂は

「治療で治るのならば、その患者さんを内科で引き受けるが。」

と鈴木に言った。鈴木は田中が治療しても治ると言えず言葉に詰まった。その鈴木の態度を見て高坂
は不快な顔をして

「患者さんはお前のおもちゃじゃ無いんだぞ！治らないなら治療しないで普通に緩和ケアを続けるべきだろ。」

と高坂は鈴木を怒鳴りつけた。鈴木は抗がん剤を使っても治せないのをわかっていたから、とても高
坂に言い返せなかった。しかし、田中のことを思い

「治せませんが、患者さんが治療して欲しいと思うなら、治療してあげるのが医師の務めじゃないでしょうか？」

と苦渋の思いで高坂に訴えた。それを聞いて高坂は少し考え、鈴木に

「患者さんがどうしても治療して欲しいというなら治療を認可しよう。ただし、効果が無いとわかればすぐに中止して、患者さんに治療しても効果が無いと説明してやりなさい。そして治療しない方が本人の為になる時もあることも十分に説明することを忘れずにな。」

と言った。鈴木はその高坂の正論をただ肝に銘じて

「ありがとうございます。」

と礼を言った。高坂は白紙の医薬品の使用認可証を出し数枚ハンコを押して、鈴木に渡した。これが尋常で無いことは鈴木でもわかった。普通は鈴木が使用する医薬品を書いてから高坂に提出して、認可を得るものである。高坂がハンコを押したまま鈴木に渡したから、鈴木はどんな医薬品も薬剤局に提出すれば高坂の認可があるということで使用出来ることになった。

「これだけで足りないなら連絡しろ。何枚でも用意してやる。」

と高坂は鈴木に言った。鈴木は高坂の配慮にただ

「ありがとうございます。」

と繰り返すだけだった。

内科部長室を出た後、鈴木は一目散に緩和ケア病棟に向かった。すぐに田中の治療方針を決めなければならない。治療は抗がん剤だけではなく放射線治療も考えていたから、すぐに放射線治療のスケジュールを立てなければならなかった。

第7話　第2の関門

鈴木は急ぎ緩和ケア病棟に辿り着いた。その鈴木に気付いた武田看護師長が鈴木に

「鈴木先生、田中さんを治療するってどういうつもりですか？ここは緩和ケア病棟です。患者さんを治療する病棟じゃありません。あなたは赴任して間もないからわからなかったかも知れませんが、すぐに考えを改めてください。」

ときつく言った。ベテランの看護師となると鈴木のような若い医者は教わる立場になるから、鈴木は武田に頭が上がらなかった。武田もそれがわかってるから、今回も鈴木に強く言い放った。しかし、鈴木にしてみれば治療は医師の義務であり、治療は武田が口を出せる立場では無かった。何より高坂内科部長から認可をもらってる以上、武田の言うことを聞く必要が無いと感じた。

「武田師長、田中さんが治療を受けたいと言ってる以上、治療するのが医師の務めです。だから治療はします。」

と鈴木は反論した。その反論に武田は顔を真っ赤にして

「あなたは指示を出すだけだけど、私達看護師は仕事が増えるだけです。治療して治るならともかく患者さんを苦しませるだけの治療なんかに大事な部下を付き合わせるわけにはいきません。そんなに治療したいなら全部一人でやりなさい。やってみれば私達看護師がどんな思いをして看護をしてるかわかります。」

と言い放った。そこまで言われると鈴木は何も反論が出来なかった。

確かに鈴木の行う治療は田中の病気を治すどころかただ苦しむ時間を長くするだけである。当然看護の量も治療しない時に比べると倍の量になるだろう。高坂は鈴木の経験の為に認可したが、逆に武田はそんなことより看護師達を優先しているから、鈴木のやろうとしていることを認めることは出来なかった。さらに武田は

「患者さんのわがままをいちいち聞いていたら病棟は機能がマヒしてしまいます。先生も一個人の為ではな病棟全体のことを考えて判断してください。患者さんは田中さんだけじゃないのだから。」

と鈴木に厳しく言った。この武田の正論には鈴木は反論しようがなく、どうしようもなかった。だけども鈴木は医師としての情熱が、武田の正論を受け入れることを拒否していた。鈴木の体は武田の正論を拒絶し、頭が正論を覆そうと働いていた。

「武田師長、私からもお願いします。田中さんは治療を受けられることを喜んでました。田中さんにとって治療がケアです。」

と二人のやり取りに割って入ったのは看護師の高橋だった。

第8話　武田の認可

二人は会話に突然割って入ってきた高橋を見た。続けて高橋は

「確かに鈴木先生のやろうとしていることは，私達看護師には負担が増えることです。だけど田中さんを治療しなかったら田中さんは今よりも鬱がひどくなって、同じように私達の負担が増えるだけです。」

その現場からの声に武田は考えを改めざるを得ず、鈴木は渡りに船のような心境で高橋の意見にうなずいた。武田は少し考え

「まずは田中さんのご主人さんに了解を取って！治療云々はそれからだから。」

と看護師長として高橋に指示した。それを聞いて高橋はチームリーダーとして田中の夫に電話して、田中を治療していいか確認を取り始めた。その間、武田は田中を治療することになるとどうなるか考えた。

ここで治療するのか、内科病棟に移動してもらうべきか、内科病棟に移動ならば内科病棟に事情を説明して田中を受け入れて貰うわけだが、内科病棟の事情で田中を受け入れてくれるとは限らないので、武田は対応に困った。こちらの都合で内科病棟に迷惑をかけるわけにはいかないからと、武田は緩和ケア病棟でそのまま田中を治療することにした。

「田中さんのご主人さんに了解取れました。田中さんが望むなら治

療してくださいとのことです。」

と高橋は二人に向かってそう言った。それを聞いて武田は鈴木に

「鈴木先生、田中さんは改善の兆候が見られるまでこの病棟で引き受けます。それまでこの病棟で治療行為をしてください。ただし、治療がまったく無意味なら即座に止めて貰います。それでよろしいでしょうか？」

と言った。

「はい、効果が無いなら皆さんに迷惑を掛けることになるだけですから、即座にやめます。」

と鈴木は武田に伝えた。それを聞いて武田は

「了解してくださるなら田中さんを治療しても構いません。だけど田中さんに先生の方からきちんと治療の説明を十分に行って同意を得てからにしてください。そこは私達看護師が口出せる立場ではないですから。」

と鈴木にきつく忠告した。そのことも鈴木は素直にうなずくしかなかった。

第9話　ホスピスという場所

鈴木は武田の認可を得られたから即座に田中の治療を始めることにした。先ほど高坂から貰った薬剤の使用認可証にこれから使う抗がん剤の名称を書き出した。そして

「ゾラデックスとアナストロゾールとフコイダンを薬剤局から貰ってきてくれ。」

と鈴木は高橋に渡した。高橋は配下の看護師にその紙を渡し、薬を貰ってくるように指示した。鈴木は放射線治療もすることにして、高橋に検査と放射線治療の予約を取るように頼んだ。高橋はまた配下の看護師に検査部と放射線科に予約を入れるように指示し、自身は田中の看護計画の見直しに着手した。鈴木が簡単に使用認可証を看護師に渡すから、武田は不審に思いテーブル上に置いてあった残りの認可証を見た。その認可証を見て武田は驚いた。認可証にはあらかじめ高坂内科部長のハンコが押してあった。先にハンコが押してあるということは、鈴木はどんな薬も高坂の認可を得て使用出来るということである。この時初めて武田は鈴木が高坂に信頼されていることを知った。

そして鈴木は治療方針の説明の為に田中の病室に向かった。朝のミサが終わり、丁度田中は自分のベットに戻っていた。

「あ、田中さん、今よろしいですか？」

鈴木はあわてて田中に声を掛ける。田中はあわてて鈴木の方を見て笑顔になった。田中にとって念願の治療が始まるからついうれしくなったのである。

「はい、大丈夫です。」

と田中は答えた。それを聞いて鈴木は

「治療方針ですが、まずは抗がん剤と放射線治療でがんを手術可能

な大きさまで小さくします。その後は外科手術でがんを取り除いて、また抗がん剤と放射線でがんを完全に消し去ります。」
と説明した。その説明は田中に希望を持たせるには十分過ぎて、田中はとても嬉しそうに
「やっと窓の外の世界に戻れるのですね。」
と語った。田中に窓の外と言われて鈴木は戸惑った。窓の外とは何を意味するかわからなかったからだ。その戸惑う鈴木を見て田中は
「窓の外とはこの窓の外です。」
と言って田中は鈴木を病室の窓まで案内した。鈴木は田中に案内され、病室から窓の外を覗いた。窓の外は普通の景色だった。
「ホスピスから離れ、普通の世界に戻る、それが私の願いでした。」
と田中がしみじみと語った。その田中の語りを聞いて、鈴木は初めてホスピスがどんな所か理解出来た。

第１０話　治療開始（前書き）

知識不足で薬の選択を間違えていたので一部前話から変更してます。

第１０話　治療開始

鈴木は医師として田中のホスピスからの生還を望み、田中に希望を与えるように

「戻りましょう。早く薬を飲んで普通の世界に戻りましょう。」

と言った。若さゆえに鈴木は医師としての判断を曇らせていた。否、田中のホスピスからの生還の熱意が鈴木の医師としての判断を曇らせていた。

「これで私は死んだら地獄行きですね。」

と田中は笑顔で語った。

「えっ？」

突然のことで鈴木は、田中が地獄に行かなければならない理由がわからなかった。

「だって私は神の意志に逆らって生きようとしてますから、死んだら私は天罰で地獄に行くことになります。」

と田中が鈴木に説明した。何だそんな理由かと鈴木はほっとすると同時に

「それなら僕も地獄行きですね。神に逆らって田中さんを生かそうとしますから。」

と笑いながら語った。そして

「僕も地獄に行きますから、安心して薬を飲んで治してください。」

と言って田中を安心させようとした。続けて

「では看護師に薬を持ってこさせるのでそれを飲んでください。」

と言って田中に薬を飲ませることにしてナースステーションに戻った。ナースステーションには先ほど頼んだ薬が届いていた。鈴木はすぐに薬の量を試算して、1回目の薬剤投与を看護師達に指示した。しかし高橋が

「鈴木先生、田中さんの検査が終わってないのですが、薬を投与していいのですか？」

と尋ねた。医師は常に人の生死に関わるから、安易に判断が出来ず、必ず検査してから治療方針を決めていた。だから高橋が鈴木の行為を変に思い、大事を取って質問してきた。その問いに鈴木は

「今回は1分1秒も早く田中さんのがんを消滅させなければならないから、どうしても検査の先に投与しときたい。本格的な治療方針の決定は検査の後に決めます。」

と高橋に説明した。それを聞いて高橋は鈴木の考えに同意して、それ以上何も聞かなかった。

高橋が配下の看護師に田中に経口と皮下注射で抗がん剤を投与す

ることを説明し、田中のもとに
送った。ここで鈴木が抗がん剤の副作用について高橋に説明しとけば後で起こる出来事は防げたかもしれなかった。しかし、鈴木は副作用のことを楽観していて、高橋も副作用のことを忘れていて鈴木に聞くのを怠ってしまった。

田中の治療が始まったとはいえ、鈴木は田中の治療に専念することは出来なかった。武田師長が鈴木が緩和ケアのことに詳しくないから、本や現場を見て貰って勉強させることにしたのだった。

第１１話　治療方針の決定

鈴木は、実際に看護師達が患者の世話をする姿を見て、緩和ケアとはどういうものかをしっかり学んだ。見た目は健康な患者も居れば、食事、排せつなど看護師の世話が無いと何も出来ない患者も居る。ある患者は腹部に長い針を刺して腹部に溜まる水を抜いていた。その水は体液で本来なら無色透明だが、がんの影響で黄色で汚く濁っていた。それを時間を掛けて抜くのである。そして腎臓ががんになると血尿が出て、さらに排尿困難になれば膀胱にカテーテルを注入して尿の排泄をしなければならない。目の前の看護師達の大変さを理解した鈴木は、武田が看護師の負担をこれ以上増やさせないと努力した気持ちが痛いほどわかった。

鈴木が緩和ケアを学んでる間に、田中は精密検査を受けていた。血液検査、尿検査、肺活量の検査、全身の転移状況を調べるためにＣＴスキャンを受けていた。当然この検査は田中の体力を徐々に奪っていた。

検査が終了し、田中は疲れた状態で自分のベットに横になった。抗がん剤の副作用の影響で体がだるく嘔気がし始めていた。しかしまだ症状が軽かったから、田中は看護師達に報告しないでじっと我慢していた。

田中の検査結果が次々と鈴木の元に送られてきた。鈴木はすぐにそれらを見て田中の状態を調べた。

ひどい、ひどすぎる

鈴木は田中の状態を知って愕然とした。健康そうな体だが、がんの病巣は各体内に散らばっていた。腫瘍マーカー値も普段診てきたがん患者よりも高かった。鈴木のような若輩が内科で見てきたのは、外科に移って手術を受けれるレベルのがん患者ばかりで、鈴木自身が担当医ではなく、他の担当医師に参考に見せて貰ったものだから、詳しくは知らなかった。田中のような末期レベルは鈴木には荷が重すぎるような感じで、内科では見ることすらさせてもらえなかった。

ＣＴスキャンの結果を見て、鈴木は放射線治療でがんの小さいものを死滅させるか、大きいものを縮小させるべきか考えた。考えた結果、小さいものは抗がん剤で死滅させればいいと思い、大きい病巣の縮小を選んだ。さらに手術しづらい場所を選ぶことにして、照射位置を決め、放射線科に田中の治療の依頼書を送った。そして田中の抗がん剤の投与の増加を考えていた。

第１２話　放射線科医の戸惑い

すべての検査が終わり、田中は疲れ果ててベットに横になった。
配られた食事はすでに
冷めていて、抗がん剤の副作用から来る食欲不振も重なって、昼食
には箸一つ付ける意欲
が無かった。看護師が昼食の配膳を下げに来て、田中が昼食に手を
付けて無かったので看
護師が

「田中さん、食べれなかったのですか？」

と田中に聞いた。その問いに田中は

「ええ、食欲が無くて。」

と簡単に答えた。ここで看護師が田中の異常に気付けばよかったが、
食欲不振が日常茶飯
事の緩和ケア病棟だから看護師は何も問題と思わず田中に

「でわ、お食事下げますね。」

と言って昼食を下げて、何事もなかったように田中の前から去った。
そして田中が疲れて
寝てるときに別の看護師が来て

「田中さん、２時から放射線科で治療を行いますから、この書類を
持って２時前に放射線
科に行ってもらえませんか。」

と言って書類を田中に渡した。
２時１０分前になり、田中は一人で歩いて放射線科に向かった。当然看護師は誰一人付
添せずに、田中は体調が良くないまま放射線科に向かった。放射線科の窓口に辿り着き、
窓口に書類を出した。受付係はしばらくお待ちくださいと言って田中を待合席に座らせた。
放射線科医の平田は緩和ケア病棟の患者だから、いつもの痛みを緩和するための放射線
治療だと思い、平然と田中が持ってきた治療指示書にざっと目を通した。見ると数字は普
通であるが、治療箇所がいつもと少し違っていて、しかも数が多かった。平田は改めて見
直すとそこに書いてあるのは本格的な放射線治療の指示であった。平田は看護師が間違え
たのか思い、書類の入っていた袋を見直すと第１４病棟と書いてあり、緩和ケア病棟で間
違えなかった。それでも平田は信じられずに書類と一緒に入っていたＣＴの画像写真をチェ
ックした。そこには普通のがん患者じゃないくらい、がんが転移した状態の画像写真があ
った。

いったいどうなっているんだ

平田は治療の指示箇所からいって、手術で取り除けそうなとこを避けてるから、内科の医
師からの指示書に見えた。しかし患者の状態は緩和ケア病棟の患者である。平田はあまり

の不可解さに内線で緩和ケア病棟に電話し、田中の主治医を呼びつけることにした。

第１３話　平田の説得

「第１４病棟です。」
「はい。鈴木先生、放射線科からです。」
看護師が鈴木に放射線科から内線で電話があることを伝えた。すぐに鈴木は看護師から受話器を受け取り
「お電話替わりました鈴木です。」
「放射線科の平田だが、田中敏江さんは緩和ケアの患者さんか？」
「はい、そうですが。」
「今回の治療箇所が普通より多いがこれで問題ないのか？」
「はい、がん細胞を死滅させるのが目的ですから、今回はこれで十分です。」
「それにしても多過ぎじゃないのか？」
「いや、治療が目的ですからこれでもまだ足りないくらいです。」
「治療？ケアが目的の治療だよな。」
「いいえ、体内から完全にがん細胞を無くすための治療です。」
「治療ってこんな状態で完治は・・・・、電話じゃうまく言えないから放射線科に来てもらえないか？」
「わかりました。今すぐ伺います。」
鈴木は電話を切って放射線科に向かった。平田は田中のＣＴの画像写真を新たに見て、こんなの治せるわけないだろと憤慨していた。その間、待ち席の田中は体調が少しずつ悪化してきて今すぐにでも倒れそうだった。
鈴木が放射線科に到着してすぐに診察室に入った。そこには平田が画像を見て、難しい顔をしていた。

「田中の主治医の鈴木です。」

と鈴木は平田に自己紹介をした。平田は鈴木が若いと知り、呆れて

「こんな状態で治療して完治すると思うのか？」

と鈴木を問い詰めた。鈴木は自信なく平田を前にして治ると言えなかった。

「画像からはっきりわかるのは１０数か所、見つけれないのを含めれば１００近くあるだろ。」

平田は鈴木に教えるように語った。鈴木は平田の言うことを受け入れながらも

「小さいがんは薬で根絶します。だから大きい病巣だけを放射線で小さくしたいのです。」

と平田に訴えた。

「小さくしてどうする？」

平田は鈴木の治療方針が不可解で受け入れられなかった。

「小さくして薬で無くします。」

と鈴木はそう答えた。

「それで完治するならすべてのがん患者は助かっているはずだが？」

平田は鈴木の甘さを厳しく追及した。鈴木は平田の正論には反論しようがなかった。

「とりあえず痛みを減らすためのリンパ節への照射はするが、治療は悪いがあきらめてくれ。」

平田は鈴木に治療をあきらめるように言った。鈴木ははいそうですかと治療をあきらめることが出来ないから返事は出来なかった。

その頃、田中は気分がひどくなり待ち席に横になった。その田中の異変に気付いた放射線科の看護師があわてて田中に呼び掛けた。そしてすぐに診察室に入って

「先生！田中さんの具合が。」

とあわてて平田を呼んだ。平田と鈴木はあわてて待ち席の田中の元に行った。そして看護師はすぐに第１４病棟に連絡した。

「はい、第１４病棟です。」

「放射線科ですが、田中さんの容態が急に悪くなりまして。」

「わかりました。すぐ駆けつけます。」

１４病棟の看護師はすぐに受話器を置いて

「武田師長、田中さんの容態が急に悪くなったと放射線科から連絡がありました。」

と武田に伝えた。高橋もそれを聞いて愕然とした。田中の状況観察

を怠った高橋のチームのミス
だった。高橋はあわてて配下の看護師2名を放射線科に派遣した。

第１４話　治療が無理という現実

待合席の長椅子に横たわり苦しむ田中を見て鈴木はあわてて

「田中さん、大丈夫ですか？」

と必死に声を掛けた。その問い掛けに田中は

「は、はい。」

と苦しそうに答えた。明らかに抗がん剤が強過ぎて、田中の状態がひどくなったのだった。

平田は鈴木が田中の状態を考えないで無茶をするから、こうなったと怪訝そうな顔をして田中の放射線治療を即座に中止した。鈴木は田中が気分が悪いだけだと判断し、少しはほっとした。だがあれだけの薬に耐えられない体ということは、これからの治療はもう不可能だと思わざるを得ず、激しく落胆せざるを得なかった。

「悪いがこんな状態じゃ治療は無理だからあきらめてくれ。」

田中の状態を見て、平田が鈴木に厳しく言い放った。鈴木もそう思いうなずいた。しかし田中は

「先生、治療してください。私早く治りたいです！」

と苦しそうながらも力強く鈴木に頼んだ。しかし鈴木は

「田中さん、今日は無理だからこのまま帰りましょう。」

と田中を申し訳なさそうに説得した。しかし田中はそんな簡単に治療の中止を受け入れられなく、鈴木にしつこく食い下がろうとした。そんな時に緩和ケア病棟の看護師2名が駆け付け、二人掛かりで田中を持ってきた移動式ベットの上に乗せた。

「田中さんにプロクロルを飲ませてやってくれ。」

鈴木は看護師達に制吐剤を飲ませるように指示をした。そして鈴木は平田に深々とお詫びをして、急いで緩和ケア病棟に戻ることにした。

戻る途中、鈴木は武田師長に謝ることを考えていた。武田との約束で田中を治療しても無駄なら即座に治療をやめることを、鈴木は武田に約束していたからだった。

緩和ケア病棟に、田中を乗せた移動式ベットが到着し、即座に田中の病室に運ばれた。

高橋も即座に田中の病室に向かい、田中の状態を知ろうとした。高橋が病室に入ると、田中が二人の看護師にベットに移動させられていた。すぐに高橋は田中を見て体の状態を聞いた。しかし放射線治療が中止になったことに田中は落胆し、高橋の問いに答えようとしなかった。それで高橋は看護師達に田中の状態を聞いた。一人の看護師が

「鈴木先生がプロクロルを飲ませてくれとだけ言ってました。」

と答えた。それを聞いて高橋は田中が苦しんでるのは嘔吐だけだと分かりほっとした。しかし鈴木と同じく田中はもう治療に耐えられない体だと知り、落胆せざるを得なかった。

第１５話　治療をあきらめない

高橋は落胆しながら武田師長に

「田中さんの状況観察を怠ってすみませんでした。」

チームリーダーなのに初歩的なことを忘れるというミスを恥じて、高橋はうなだれながら武田に謝った。その高橋を見つめながら武田は

「あなたが中途半端なことしていたら、鈴木先生は田中さんを治療したくても治療できないでしょ。今後はこんなことが無いように全力で取り組んでください。」

と高橋に注意した。高橋は今回のことを厳粛に受け止め業務に戻った。武田は今回の高橋ミスをある意味深刻に受け止めていた。抗がん剤を飲めば当然強い副作用から田中の状態が悪くなるのは、看護師なら医師に言われなくても、わからなければならないことである。それを簡単に見過ごしたのは、看護師としての意識レベルの欠如が原因であった。その欠如の理由が緩和ケアという副作用を出させない治療、この病棟の仕組みの慣れから来ていたものだからだった。

武田は看護師達の意識の欠如を抑えるために、田中を治療しても治らないと自分自身が思ってること自体を改め、緩和ケア病棟の看護師全体が田中を治療す

れば治ると思う、本来の
看護師としての気持ちの在り方を持つようにしようと思った。
鈴木が放射線科から帰ってきた。鈴木は武田を見つけて
「武田師長、ご迷惑を掛けてすみません。田中さんの治療は諦めます。」
と鈴木にとって苦渋の報告を武田にした。しかし武田は
「何言ってるのよ！私達看護師は、田中さんの治療を支援する為に看護体制の改めをしたばかりです。いまさら治療をやめるなんてことは出来ないわよ。」
ときつく鈴木に文句を言った。そう言われてもと鈴木は返答に困った。続けて武田は
「まだ田中さんは治らないと決まったわけじゃないでしょ！あなたが簡単にあきらめたら、田中さんはどうするのよ？」
とさらに鈴木を追い詰めた。こうまで武田に言われると鈴木は田中の治療をやめるとは言えなかった。しかし、放射線科の協力を得られない以上、治療方法が無く、治療を続けるとも言えなかった。
この重苦しい空気の中、一本の電話が鳴った。看護師が受話器を取ると放射線科だった。
看護師が要件を聞き受話器を下ろした。そして鈴木に
「鈴木先生、放射線科から１８時から田中さんの放射線治療を始め

ますとおっしゃってます
。」

鈴木と武田はその伝達を聞いて希望が湧いてきた。

「治療は続けます。」

鈴木は武田にそう言った。それを聞いて武田は

「頑張りなさい。私達看護師も全力でバックアップしますから。」

と鈴木を励ました。この時武田は、高坂内科部長が鈴木に白紙の薬物使用認可証を鈴木に渡
した意味がわかった。治療をあきらめてはいけないと鈴木にすべてを託したのだと。

第１６話　田中の回復

もう一度田中の治療を始めることになって、鈴木と看護師達はそれぞれの業務に戻った。
田中の治療方針は変わらず、放射線と抗がん剤の併用で進めていくだけだった。ただ田中の状態からいってこれ以上の抗がん剤の投与は無理だから、放射線治療に期待するしかなかった。
高橋は田中への看護計画の見直しに着手した。抗がん剤だけではなく、放射線治療の副作用も見逃さないように、担当看護師及びチーム全体で田中の体調を管理できるように、想定される副作用をひとつ残らず調べた。この高橋の行動に他の看護師達も高橋の影響を受け、自分達の看護の仕方が十分か考え出した。この病棟の雰囲気の変化を武田師長は、良い傾向だと喜び、看護師達を全体的にバックアップすることにした。
一方、田中は１８時から放射線治療が始まることを看護師から知らされ、ほっとした。
田中にとって治療が止まることは死刑宣告に等しいわけで、放射線科から帰ってきたときから死を考え、精神的に苦しんでいた。精神が落ち着きだした田中は薬が効いてきたから、嘔吐も無くなり、昼食が不十分だったからお腹が空いてきた。しかし病院の売店までの歩行は困難だから、田中は看護師に頼んで何か買ってきてもらおうとナースコールのボタ

ンを押した。
　ナースステーションで田中の鳴らしたナースコールを近くの看護師が受け取った。
「どうされました？」
「お腹が空いたので売店で買い物して欲しいのですけど。」
「わかりました、すぐ行きます。」
「鈴木先生、田中さんがお腹が減ったので何か食べたいそうです。」
看護師が鈴木に田中のことについて聞いた。その問いに鈴木は
「構いません。どうぞ食べさせてやってください。」
と答えた。田中の食事に関しては何の懸念も無く、むしろ体調が回復してきたということ
だから逆にうれしい話だった。
　高橋のチームの看護師が田中の元に向かった。そしてベットで寝ている田中を見て
「田中さん、お体の状態はどうですか？」
と聞いた。
「ええ、吐き気も無くなってだいぶ楽になりました。」
と田中は答えた。それを聞いて看護師は
「良かったですね。それで何食べられますか？」
「パンでいいです。パンなら何でもいいです。」
「じゃあ買ってきますね。後、歩けないならまたナースコールお願いします。トイレとか
すぐ準備しますので。」
看護師は田中からお金を受け取り、売店までパンを買いに行った。
看護師に言われて田中
は歩けるようになることを意識し始めて、トイレぐらいは自分で行けるようになろうと心
の中で思った。

第17話　治療前

ナースステーションでは、高橋が田中が普通に食事を取れるようになったので、引き継ぎの準夜勤の看護師達に、田中の夕食をナースステーションで預かり、田中が放射線科から帰ってきたら、夕食をレンジで温めて出すように指示する為に指示書を書いていた。

パンを買いに行った看護師は、買ってきたパンを田中に渡し、そのままナースステーションに戻った。田中は受け取ったパンをかじりながら、夕方から始まる放射線治療に期待を膨らましていた。

「田中さん、調子はいいですか？」

鈴木が田中の状態を確認しに来た。

「はい、おかげさまでだいぶ良くなりました。」

「それなら夕方の放射線治療は大丈夫ですね。」

「はい、今すぐでも受けたいくらいです。」

田中は早く治療を受けたくて鈴木にアピールした。しかし，放射線科の都合もあるから

鈴木は

「こちらの都合で時間を変更出来ないので、夕方まで待ちましょう。それではまた。」

と言って鈴木は田中の元から離れた。鈴木は田中だけが患者じゃないから、田中にいつまでも構ってる余裕など無かった。

時間が経ち、ナースステーションに準夜勤の看護師達が到着し、引き継ぎが始まった。

高橋は準夜勤の看護師が二人しかいないことに気付き、放射線科までの田中の付き添いは自分自身ですることにした。
　田中の放射線治療の時間になったので、高橋は田中を迎えに行こうとした。その時鈴木が高橋に
「高橋さん、一人だけですか？」
と聞いてきた。
「はい、看護師もそんなに余裕が無いもので。」
と高橋は鈴木に申し訳なさそうに答えた。それを聞いて鈴木は
「僕も協力しますから移動式ベットで田中さんを案内しましょう。」
と言って高橋に移動式ベットの使用を勧めた。
「ありがとうございます。」
そう言って高橋は田中の搬送に移動式ベットを使用することにした。ベットを二人で移動しながら田中の病室に向かった。丁度田中は自分で歩いていこうとベットから出て立っていた。
「田中さん、お迎えに来ました。」
二人は田中にベットに乗るように勧めた。田中は歩いていこうと思ったが、二人に勧められて仕方なくベットに乗った。そして鈴木と高橋は田中の乗ったベットを引っ張って放射線科に向かった。

第１８話　田中の体次第

移動式ベットは無言で放射線科に向かった。鈴木も高橋も注意力が散漫にならないように二人で会話など出来ないからだった。エレベーターを降り、放射線科のある病棟に向かう。そして放射線科に辿り着き、二人は田中を静かに降ろし、待ち席に座らせた。高橋は窓口で放射線科の看護師と話し、鈴木は中に入った。田中は先ほどより気分はいいが、放射線という言葉に不安があり、小刻みに震えていた。田中はホスピスに移る前に放射線治療を経験済みだから、不安で怯える理由など無かった。しかし、前よりも危険な治療をするのではと一方的に思いこんで、恐怖をわずかながらも感じていた。

高橋と看護師との話がついて、高橋は受付の窓口から離れた。高橋は田中の容態は大丈夫で別に付き添う必要が無いから、一旦ナースステーションに戻ろうかと思った。しかし、田中がすぐに呼ばれたので付き添いで治療室に入ることにした。

中では鈴木と放射線科の平田が打ち合わせをしていた。

「照射はここここここの３ヶ所だけ行う。」

と平田は鈴木に説明した。鈴木は３ヶ所なら緩和ケアの治療だと思い、その場で落胆した。

だがすぐに平田が

「普通は３グレイだが、今回は５グレイでやる。早く終わらせて次の場所に移動したいからな。」

と追加で説明した。それを聞いて鈴木は落胆から元気になってきた。

頼みの放射線治療が
本格的に行われるのならばと、今回の治療に希望が湧いてきた。
「ただ、その分副作用が強いから、駄目なら弱くするしかない。その場合は患者をあきらめなければならなくなるが。」
と厳しい語調で語った。一転して希望から現実に戻される鈴木、しかし抗がん剤をこれ以上増やせないから、まだ副作用の弱い放射線治療にすべてを託すしかなかった。
　ＣＴで調べたがんの病巣を狙いコバルト照射装置が平田の手によって狙いが定められる。
その前に田中は動けないように体が固定される。２０分掛けて同一箇所に照射するためで、動いて照射位置がずれれば放射線障害を起こすから、その間田中は動くことができなかった。
狙いが定まり、平田は被曝を避けて部屋から出て外部からスイッチを入れた。平田はその場で待機し、鈴木はその場で経過をじっと見守った。照射の間、鈴木は退屈で外に出た。
そして待合席に座っている高橋を見て
「高橋さん、帰らないのですか？ベットは僕一人で引っ張っていけますから、帰ってもいいですよ。」
と話しかけた。しかし高橋は
「そういう訳にはいきません。放射線科の看護師さんが残ってくださってるのに、私だけ帰れません。終わるまで残ります。」
と帰るのを拒否した。そういう気持ちならばと鈴木は高橋を帰らすのをあきらめた。そし

て高橋と同じく待合席の椅子に座った。
「先生、治療はうまくいきそうですか？」
高橋がそう鈴木に聞いた。
「わからない、田中さんの体が治療に耐えられるか耐えられないかだから。」
と答えた。

第１９話　看護とは

治療時間は長く、二人は座って待って居られなかった。二人は放射線科の中に入り、田中の状態を見ようとした。中に入ってモニターを見ながら機械を監視している平田の邪魔をしないようにそっと治療室の中が見える中空の窓の前に来た。田中はベットの上で固定されたまま、装置から放射線を照射されていた。体を固定され、患部以外に放射線が当たらないようにプロテクターで保護され、見るからに苦しい状態だった。

二人にとって長く見るに耐えれない光景だったから、すぐにその場を離れ外に出た。

二人は興味本位で田中の状態を見に行ったことを心の中で恥じた。立場的に知る必要があるとはいえ、時間潰しのような気持ちで行って、見苦しいからすぐ戻ってくるでは田中に失礼である。二人は貝殻のように自制して口を閉ざして終わるのを待った。

１回目の照射が終わったらしく、放射線科の看護師がそのことを二人に伝えに来た。

「次も何分ぐらい掛かりますか？」

田中を心配するように鈴木が看護師に時間を聞いた。

「多分、今と同じくらい２０分は掛かると思います」

と看護師は答えた。

「わざわざ残ってくださってすみません」

高橋が新たに看護師にお礼を言った。

「いいですよ、気になさらないで。看護師として患者さんに尽くす

のが仕事ですから」
と看護師は謙遜して答えた。その答えに高橋は自分のやってることは何だと申し訳なさそうにその場を引いた。看護師もいつまでも二人の相手をして居られないので、すぐに中に入って行った。鈴木と高橋はやることが無く、再び待合席で田中の治療が終わるのを待つことにした。
　しばらくして高橋が思い詰めたように
「緩和ケア病棟の看護師はいくら患者さんに思いを込めて尽くしても、患者さんは死んでしまうからすべてが無駄になります。だから私は自然に仕事と割り切って看護をしてました。だけど今回は田中さんが死ぬとは限らないから、今度こそは田中さんに生きて緩和ケア病棟を出られるように、思いを込めて看護が出来ると思います」
と語った。その高橋の語りを聞いて鈴木は
「僕も初めて緩和ケア病棟に来た時は、医師としての意欲が無くなってました。しかし患者さん達は本当は生きたいのです。生きてここを出たいと思ってると分かってから医師としての意欲を取り戻せました。だから高橋さんも、田中さんだけではなく他の患者さんにも思いを込めて看護して欲しいです。」
と熱く語った。それを聞いて高橋は
「先生の言う通りです。みんな本当は生きたいのです。私はそんなことも分からず、この人達はもうすぐ死ぬんだと思いながら看護してました。今日、武田師長に「看護

師で無くなっていた」と怒られて、実際にその通りで私達は看護ではなく”作業”をしていました。だけど患者さん達が生きて病院を出れるなら、私達緩和ケアの看護師も看護師で居られたと思います。場所が場所だけに看護師で無くなって居ても仕方がなかったと思います」

と高橋は心の奥底から訴えた。その高橋の訴えを聞いて鈴木は「僕が研修医の時、とある病棟の師長さんが「私達看護師は患者さんにありがとうと思われて初めて看護をしたことになる」と看護師さん達に言ってました。だから患者さんが今後生きようが死のうが、ありがとうと思われる行為をした時点で看護をしたことになるから、それだけで看護師と堂々と言えるのじゃないかと思います。僕ら医者だって、患者さんが死ぬようなことになっても、医師として最善を尽くしたと堂々と言ってます。だから最善を尽くさなければ医師じゃないですけど。最善を尽くしてるから例え・・・・・・・」

と高橋を説得しようとして途中で言葉が詰まった。鈴木の言うことを黙って聞いていた高橋にも鈴木の言葉に詰まった後の言葉がわかった。田中が死んだとしてもだと。

第２０話　治療後

看護の話が終えた後、二人は黙ったままだった。治療はまだ終わらず、田中はがんと闘っている最中で、放射線科の人達が頑張ってる中、世間話などの軽い話などをして時間潰しなど、二人には出来なかった。

しばらくして放射線科のドアが開き、看護師が

「治療は終わりました」

と二人に報告した。鈴木と高橋は安堵して放射線科の中に入って行った。鈴木は即座に平田の方に行った。平田は胸のレントゲン写真と向かい合うようにして、深刻な顔をして座っていた。鈴木が近くに寄り、同じようにレントゲン写真を見る。

「ここがまだ小さいけど気になって・・・・・」

平田が深刻に鈴木に語る。鈴木は平田が指した場所を見た。左肺下部の小さな黒い影だった。

「いざ当てるとなるとどうしても肋骨が邪魔になって、当てにくくてどうしようかと」

鈴木は放射線治療に詳しくは無いが、平田の言いたいことは分かった。骨が邪魔して放射線の効果が半減することと、放射線を骨に当てれば骨の中の組織ががん化する恐れがあるから、当てにくいということである。

「ここはそんなに危険なとこですか？」

鈴木は平田に聞いた。場所的には手術で切りやすい場所なので、鈴木はそんなに問題

視してなかった。
「ここから肺全体に転移すれば、肺を全摘出出来ない以上まず助からないだろう」
平田は鈴木にあきらめを諭すように語った。しかし鈴木はそう簡単にあきらめられない。
「抗がん剤で転移を防ぎます。転移さえしなければ手術で取り除くこと出来ますから」
と言い張った。
高橋は放射線科の看護師の手伝いをして、緩和ケア病棟から持ってきた移動式ベットに田中を放射線科の看護師と共同で移した。これで緩和ケア病棟に向けて出発出来るが、高橋一人でベットを移動するのは病院の規則で禁止されてるから、高橋は鈴木を待つことにした。それを察知して放射線科の看護師が
「私も手伝いましょうか？」
と高橋に言った。しかし高橋はそれを申し訳ないと思い断った。そして緩和ケアから一人呼んで田中を運ぼうかと思った。それで鈴木に了解を取ろうと鈴木の元に向かい、平田と話している鈴木に向かって
「鈴木先生、緩和ケア病棟から一人呼んで田中さんを運んでいいですか？」
と聞いた。鈴木はあわてて
「すみません、僕が付き添います。平田先生ありがとうございました。」
と言って高橋と一緒に田中の元に向かった。
「田中さん、遅くなってすみません。さあ戻りましょう。」
鈴木はそう言って田中を乗せた移動式ベットで緩和ケア病棟に向か

った。
途中、二人は注意力を落とせないから終始無言で、田中も疲れていたから何も二人には話し掛けなかった。
　緩和ケア病棟に辿り着き、田中を病室に運ぶ。二人掛かりで田中をベットに寝かせ、
一回目の放射線治療はこれで終了した。
「田中さん、お体が苦しくなってきたらすぐ私達看護師に連絡してください。」
高橋がそう田中に伝え、鈴木と高橋はナースステーションに戻った。ナースステーションに戻ると、高橋は準夜勤の看護師達にすぐに田中の食事をレンジで温めることを指示した。そして放射線治療の副作用を考えて、田中の状況観察を怠らないように指示をした。
「鈴木先生、先程大事な話の邪魔をしてすみません」
と高橋が謝った。しかし鈴木は
「いいですよ、明日も放射線治療がありますから、その時話せばいいだけのことだから」
と言って高橋をなだめた。もうこれで重要なことは無く、高橋は業務を終えることにした。鈴木は田中の容態の変化に備え、すぐには帰らないつもりだった。
　高橋は明日の勤務に備え緩和ケア病棟を退出し、ナースステーションには準夜勤の
看護師と鈴木だけになった。鈴木は田中が夕食を取れないほど体調が悪くなっている
なら、今後の治療が難しいと懸念だったが、無事食事を済ませられたので今はほっと

した。

第２１話　平穏な時

しばらくして一人の男がナースステーションの受付に来た。看護師が応対し
「鈴木先生、田中さんのご主人さんが先生に会いに来てます。」
と鈴木に報告した。鈴木はすぐに田中の夫の元に向かい
「どうも田中さんの担当医の鈴木です」
と田中の夫に自己紹介した。
「先生、治療とは家内が助かるということですか？」
田中の夫はそう真剣に鈴木に聞いた。
「ここでは何なんでカンファレンス室でお話しましょう」
と鈴木は田中の夫をカンファレンス室に案内した。カンファレンス室とは医師や看護師が
患者さんと対で話す部屋で、普段は看護師達がそこで食事を取ったり、休憩したりしている。鈴木は田中の夫と席を向かい合って座る、そして深刻に
「奥さんは助かるか助からないかは今は何とも言えません。ただ本人の御希望で治療を始めましたが、私としても全力を尽くして全快を目指していきたいと思ってます」
と丁寧に答えた。鈴木も必ず治ると思ってますと強く言いたいが、前に神田副師長に釘を
刺されたことを思い出し、田中の夫に希望を持たせないように曖昧に答えるしかなかった。
「そうですか、そうですよね。家内のがんが簡単に無くなるわけ無いですよね」
そう田中の夫はしみじみ答えた。それを聞いて思わず、鈴木は必ず完治させますと強く言
おうとしたが、それを遮るように田中の夫が

「わかってます、敏江がこのまま治らなくても少しでも長く生きてくれれば、それで十分
です。長く生きられるだけでも、先生に感謝してます」
と目尻に涙を溜めて訴えた。鈴木は田中の夫にどう言葉を掛けていいかわからず、ただ黙
ったままだった。
「先生、神様は私達夫婦を何故苦しめるのでしょうか？私達はただ幸せに暮らしてきただ
けなのに、何故敏江の命を奪おうとするのですか？」
この田中の夫の質問に鈴木は答えようが無かった。鈴木が神様に聞きたいくらいである。
鈴木はこんな理不尽なことをする紙に憎悪と言うか反骨心をこの時から芽生えさせていた。
「それでは先生ありがとうございました」
田中の夫はそう挨拶して、田中の見舞いをする為に、田中の病室に向かった。鈴木もこれ
以上話せることも無いので、そのままナースステーションに戻った。ナースステーション
は準夜勤の看護師二人が退屈そうに椅子に座っていた。業務的なことを終えて、ナースコ
ールが来るのを待つだけの状態である。しかも今夜は鈴木がまだ居るから看護師的には
安心出来ていた。鈴木も暇な看護師達を見て、何事も病棟に起きて無いと感じほっとした。
しかし、病的にもう長くない患者達の居る病棟である、鈴木はさすがにいつまでも落ち着
いていようとは思えなかった。
消灯時間になった。心配していた田中の状態に何も問題なく、田中の夫はナースステー
ションに挨拶して帰って行った。看護師達は各病室の消灯を見て回

る、鈴木も何事も無い
ならと帰り支度を始めた。そして看護師達が戻ってきたのを確認して、看護師達に帰りの
挨拶をして帰ることにした。
　帰りながら鈴木は、神を敬う病院に勤めながら、神の意志に逆らう行為をしようとしている
自分は果してどんな天罰が下されるのか？そんなことを考えている
自分自身に苦笑しなが
ら、長い帰途に付いた。

第２２話　それでも人は生きなければならない

次の日の朝、田中は朝のミサを欠席した。一晩寝たくらいでは疲労が取れず、田中は仕方なく看護師にミサを休むことを伝えた。ミサには他の患者達が出席して、田中が休んだことを話題にしていた。そして患者達は、例え治療しても苦しむ時間が増えるだけだと、ホスピスの方策を肯定し、鈴木の治療を暗に批判した。

鈴木は八時過ぎには緩和ケア病棟に出勤し、看護師達から田中の状態を聞いていた。鈴木には田中の具合の悪さは、放射線なのか抗がん剤なのかわからず無かったが、それでも今日の二時にまた田中の放射線治療をするつもりでいた。それだけ早くがん細胞を田中の体から除去しないことには、抗がん剤の投与を減らせないからだった。

その急がなければならないという気持ちが、他の患者達も治療を受けるなら今すぐだと思い、鈴木は各病室を回り各患者達に治療を受ける意思があるか聞くことにした。しかし、朝のミサに参加できるほど体調の良い患者達はこぞって鈴木の提案する本格的な治療を拒否した。患者達は治るかどうかわからない状態で薬漬けの人生を送るよりも、ホスピスで人間らしく生きる

ことを望んだ。
鈴木は患者達がそう思うならばと、他の患者達は緩和ケアの治療のままで進
めることにした。
　逆に田中に対しては、このまま治療を継続するか確認をすることにした。例え
鈴木が田中に対しての治療を継続したくても、田中自身が副作用の苦しみに
耐えられなくて治療を止めて欲しいと思ってるかもしれない。鈴木はそうでない
ことを祈りながら、田中に聞くことにした。
「田中さん、お体は大丈夫ですか？」
朝のミサを休んだ田中の体調を心配してそう鈴木は聞いた。
「はい、少しは楽になってきました。」
「午後からも放射線の治療がありますが、それには出れそうですか？」
「はい、大丈夫です。必ず出ます。」
田中は鈴木の問いに治療をやめる気は無いと意思表示をした。それを聞いて
鈴木は安心して
「頑張りましょう、治療を続ければ必ず良くなります」
と田中に言った。この言い方は神田副師長が付き添っていたら、また多目玉
を喰らう言い方である。ホスピスの患者に必ず良くなると言ってはいけなかった。
患者に期待を持たせるとその反動が大きいから、ホスピスでは治るとかの期待
を患者には持たせられないのだ。実際田中は鈴木にそう励まされ、希望を持ち
始めていた。

「それではまた」
鈴木はそう言って田中の元を離れた。鈴木自身治療すれば治ると錯覚してきて
いて、少し気持ちが浮ついていた。しかしその気持ちをいっぺんにぶち壊すよう
な事がナースステーションで待っていた。
鈴木がナースステーションに戻ると、麻酔科医の坂本が待っていた。
「聞いたよ。田中さんを治療してるのだって」
そう坂本が鈴木に話しかけた。
「はい、経過は良好です」
「鈴木君、大事なことを忘れてるよ？」
「え、何ですか？」
「患者さんを治療して治ったならば、その患者さんの主治医だった人は誤診をし
たことになる。つまり君は先輩のメンツを潰すことになる」
坂本の忠告は鈴木にも痛いほどわかった。上下関係の厳しい医局では先輩医
師のメンツを潰すようなことは出来なかった。続けて坂本は
「今さら治療などして治るのか？君より優秀な医師が諦めた患者さんを君は治
そうとしている。治ると考えるのはおかしくないか？」
その坂本の問いが鈴木の心に厳しく突き刺さる。けど医者である以上最後まで
努力したい、鈴木は必死に坂本に返す理屈を考えた。だがその理屈が出る前
に坂本は
「一応、治療しても問題にはならないだろう。医者なら別に誤診はあってもおかし
くないし、治療して治るならメンツうんむんより治ったことを喜ぶ

べきで、君の治
療は延命に過ぎないんだから誰も傷つかない、好きなだけ頑張ればいい」
と話を締めくくりその場を離れた。
（それでも人は生きなければならない・・・・・・・・・・）
渾身の治療を延命と揶揄されたことに鈴木は憤慨して心の中でそう呟いた。

第２３話　見えない問題

昼の回診の時も田中の体調は改善していたので、予定通り二時から放射線治療をすることになった。
今回は看護師二人が移動式ベットで田中を放射線科に運び出した。
鈴木は電話確認で昨日と同じ場
所に照射すると聞いていて別に打ち合わせをする必要もなく、あまり病棟を離れられないから、今回は
田中に付き添わなかった。
鈴木は田中を送り出した後は、他の患者達の為に医師とし何が出来るか考えた。治せないのなら治
療は逆に苦しめるだけである。しかし治療が苦痛を緩和させれるのだったら、治療も緩和ケアである。
実際、放射線治療はがんからの痛みを緩和する為に使われている。
ただ新米の鈴木に考え付くなら先
輩医師が気付いてとっくにやっているだろう、今回ばかりは坂本の言ったことが鈴木の脳裏によぎった。
一方放射線科では、平田が慎重に田中に放射線を浴びせる為に位置取りをしていた。左肺下部の腫
瘍を意識して、照射の位置取りを考えたが、実行は難しかった。腫瘍はまだ小さいし、今は他の部分が
大事だと昨日と同じ部分に照射する準備に切り替えた。
時間が経ち、ナースステーションに放射線科から電話連絡があった。鈴木は田中の容態が変化した
のかととっさに心配したが、単に治療が終わったから迎えに来て欲しいとの連絡だったので、ほっとし
た。看護師二人が田中を迎えに放射線科に向かった。そして看護師達は田中を緩和ケア病棟まで運ん
だ。

その後、田中から何もアクションが無かったから、鈴木はほっとして、勤務医としてナースステーションで待機していた。本当はすぐにでも検査をしたかったが、医療費の問題で検査は抗がん剤投与の一週間後まで出来なかった。

夕食も病棟全体で何事も無く終わったので、鈴木は一応帰ることにした。医者としては出来れば少しでも長く待機を続けたいが、いつどんな大きなことが起こるか分からないから、休めるときに休んで体力を残さなければならないことを鈴木は研修医時代から知っていたので、今日は早めに帰ることにした。

深夜勤として高橋が出勤してきた。高橋も田中の状態が気になったが、今のところ良好なのでほっとした。そして朝に田中の見守りを鈴木に引き渡すつもりで深夜勤に励んだ。

次の日の朝も、田中は朝のミサを休んだ。放射線治療は副作用が少ないとはいえ、放射線障害が田中の体調を悪くしていた。鈴木は今日は治療を休ませようかと思った。しかし治療を休めば死を意味するから、簡単に決断は出来なかった。鈴木が投与した抗がん剤の量はがん治療には普通の量だった。これ以上投与すれば副作用がきつ過ぎると思い、投薬量を増やしたくても増やせなかった。それで放射線治療を併用したのだが、副作用が幾分軽い放射線治療が、田中にそれなりのダメージを与えていた。

というより、田中自身の体が弱っていて、その分副作用の影響が出ていたのだった。鈴木はそのことに気付かず、放射線の量を強くし過ぎたのが、田中の体調を悪くした原因だと思っていた。

第２４話　良好な結果

田中の体調の悪さが、患者だけではなく、看護師達にも話題になるくらいになっていた。
看護師達も、ホスピスの方針に疑問を持ち出していた。初めは鈴木の始めた治療に好感
と願いを込めてい
たが、現実はホスピスの意味を十分わからせる状態であり、看護師達はホスピスの意味
を理解せざるを得ず、ホスピスの仕組みに合わせるように業務に励みだした。そうとは知
らずに患者達や看護師達に疑問に思われだしてることを気付かずに、鈴木は田中の治
療をどうするかで悩んでいた。
武田看護師長は看護師達があきらめムードになっていることに気付き、看護師達を叱
咤激励しようと考えた。しかしそのようなことをしても、現実的に田中の容態が良くならな
い限り何を言おうが元の木阿弥だから、看護師達の激励はあきらめ、鈴木に田中の容態
を回復させれないか問う事にした。
「鈴木先生、田中さんは回復しそうですか？」
武田は鈴木に聞いた。鈴木はその問いが、田中の体調のことだと思い
「ええ、副作用ですから、時間が経てば回復すると思います。それに改善していけば薬も
放射線も減らせますから、もう少しの辛抱だと思っててください。」
その返答に武田は頼りなさを感じ、鈴木に
「鈴木先生、患者さんも看護師達もみんな田中さんのことを気にし

てます。もし治療が効
果が無かったなら、みんな絶望を感じることになります。だから何
が何でも田中さんを治
すつもりで頑張ってください。みんな期待してますから」
と強い口調で言った。
「はい、わかりました。頑張ります」
鈴木は武田の気迫に押され、そう返事した。
　田中は体調が悪くなったのと引き換えに痛みを減らしていた。本
来なら他の患者と同じ
ようにモルヒネの世話になるところだが、抗がん剤と放射線治療が
がん細胞を減らしてく
れて、その結果体全体の痛みが和らいでいた。特にリンパ節への照
射が、完全な消滅を
目指しているから放射線による皮膚の炎症よりも、リンパ節の痛み
の緩和の方が大きく、
その分田中は気持ちよく寝ることが出来た。
　鈴木は武田に田中のことで発破を掛けられたとはいえ、これ以上
何もすることは無かっ
た。それに他の患者にも目を向けなければならないから、田中に関
しては看護師達から
何らかの報告があるまで、そのまま様子見をすることにした。
　こうして数日が経ち、田中の検査の日を迎えた。田中はこの日は
朝のミサに参加出来
るほど体調が回復していて、鈴木や他の看護師達が希望を持てるほ
どになっていた。
　ミサが終わった後、朝食を取り、看護師がこれから行う検査、検
査の目的、検査の場所、
順番、場所を田中に詳しく教え、田中は一人で歩いて検査に向かう
ことになった。鈴木は
この検査の結果で田中の運命が決まると思い、胸が張り裂けそうな

気持ちで検査結果を
待つのだった。
田中は採血から始まり、ＣＴスキャンで全身のがん細胞の状態を
調べ出した。そして肺
活量も調べ、肺に対するがんの影響度をチェックされた。検査は待
ち時間も含め、三時
間ほど掛かったが、無事田中は歩いて病棟に戻って来れたから、鈴
木はひとまずほっと
した。
田中は食事を取り、午後からの放射線治療に備えた。土日と治療
を休んでいたから、
今日は検査が終わった後でも治療をしなければならなかった。検査
結果が出てすぐに新
しい場所に照射する予定だった。鈴木はその新しい場所について報
告を受けており、この
治療には田中に帯同する予定だった。
田中の血液検査の結果が届いた。腫瘍マーカー値は前回よりもあ
る程度改善していた。
この結果は鈴木を小躍りさせた。治療が効果があったという結果だ
ったからだ。その嬉し
そうな鈴木を見て、看護師の高橋が鈴木に
「結果が良かったということですか？」
と嬉しそうに聞いた。

第２５話　深刻な問題

高橋の問いに鈴木は嬉しそうに
「ええ、前回よりマーカー値が下がってます。治療の効果があったということです」
「おめでとうございます」
高橋も治療が効果があったことを喜び、そう言った。確かに腫瘍マーカーは減っていた。しかし水準的
にはまだ高い方で、まだ予断を許せる状態ではなかった。
一方放射線科では、平田が田中のＣＴ画像写真を見て悩んでいた。
懸念していた左肺下部の腫瘍が
拡大していたからだった。肺がんの抗がん剤が投与されてなかったのと、放射線治療の対象外だった
ことが、腫瘍の拡大になったのは明らかで、この腫瘍に対して早急に治療をしなければならないと平田
は考えていた。それで平田は緩和ケア病棟に電話して、鈴木と相談することにした。
「はい、こちら第十余病棟です。鈴木ですか少々お待ちください」
「鈴木先生、放射線科の平田先生から電話です」
看護師が鈴木を呼んだ。鈴木は看護師から受話器を貰い
「はい、鈴木です」
「田中さんのことだけど、ちょっと問題が起きて、こちらまで来てもらえませんか？」
その平田の言い方に、鈴木は何事があったのかと焦り
「わかりました、すぐ行きます」
と言って受話器を置いた。そしてすぐ放射線科に向かう準備をして、看護師に
「放射線科に行ってくる」
と伝えて慌てて放射線科に向かった。突然の出来事に高橋は、鈴井

の後ろ姿をただ不安に眺めること
しか出来なかった。
　鈴木が放射線科に辿り着くと、平田は田中のＣＴの輪切り画像を見て、深刻に悩んでいた。
「どこが悪いのでしょうか？」
輪切り画像ではよくわからない鈴木が平田に聞く。
「前回言ってた左肺下部の腫瘍が大きくなってるよ。抗がん剤は効果が無かったってことだよね。」
と平田が神妙に答える。鈴木はそれを聞いて激しく後悔した。田中の体調を考えて、新たに抗がん剤を
投与してなかった。肺がんは肺がん用の抗がん剤を投与しなければならないが、鈴木は小さいからと
軽く考え、すでに投与していた抗がん剤の力で縮小できると勘違いしていた。あまりにも軽率な判断で
、経験不足で済まされないレベルの話だが、田中の体力を考えれば結果的に投与しなくて良かったか
も知れなかった。こんな理屈が通るのも、がんの末期患者を治療という特異な条件だからである。普通
なら医療ミスとして重大な問題で有り、患者の命を奪う失態だが、逆に投与すれば田中が耐えきれずに
死期を早めてたかも知れない。ただ鈴木はそんなことも考えずに
「すみません、肺がん用は投与してませんでした」
と平田に謝った。それを平田は怒るどころか逆に安心して喜び
「それなら効果が無かったという訳では無いのか。なら今日からでも投与して縮小させればいい」
と言った。その平田の穏やかな物言いに鈴木はちょっと安心し、肺の腫瘍は命に別条が無いのかと思
った。だがそれは鈴木の勘違いに過ぎず、事態は深刻だった。
「今日からこの肺の部分に照射するので、こいつを重点的にやります」

と平田は鈴木に説明した。鈴木はさっきとは打って変わって不安になり平田に
「そこはそんなに問題なのでしょうか？」
と聞いた。
「これが広がったら田中さんは左肺全摘になるよ。そんな手術を受ける体力はもう無いでしょ。もう無理
でもやるしかない」
と平田は深刻に答えた。それを聞いて、鈴木は腫瘍マーカー値の減少などもうどうでもよくなって、左肺
の悪性腫瘍のことをどう消滅させるか必死に考えた。鈴木の出来ることは肺がん用の抗がん剤の追加
だった。
　そんな深刻な状態とは知らずに田中は、早く治ることを祈りながら放射線科の前の長椅子に座って、
治療開始で呼ばれるのを待っていた。

第２６話　安易という最善

鈴木はいつまでも放射線科に居られない。すぐに田中の為に肺がん用の抗がん剤を用意しなければならない。

「では、失礼します」

と平田に挨拶して鈴木は緩和ケア病棟に戻ろうとした。そして長椅子に座っている田中と目が合った。鈴木は田中に深刻な状態のことを話せない。すぐさま

「田中さん、次は他の所を照射しますので今日はいつもと体の向きが変わります」

と誤魔化しの会話をした。田中は自分の状態が深刻だと分からず

「あの、前の所はもう治ったということですか？」

と鈴木に聞いた。鈴木は笑顔で

「治ったというより、がんは縮小しましたから次は他の所を治療します」

と田中の問いに答えた。それを聞いて田中はうれしそうに

「先生ありがとうございます。先生が治療してくれなかったら、私はこのまま死んでましたよ」

と笑顔で答える。その嬉しそうな田中を鈴木は長く見ることが出来なくて

「そんな死ぬなんて考えないで下さいよ。それでは急いで戻らなければいけないので」

と言って、田中との会話を切り上げて、緩和ケア病棟に向かった。

緩和ケア病棟に着くとすぐにＰＣの前に座り、肺がん用の抗がん剤を調べた。

（こ、これじゃ使えない・・・・・・・・・・）

鈴木は肺がん用の抗がん剤の副作用を見て愕然とした。例えば塩酸アムルビシンは骨髄機能

抑制、感染症合併、間質性肺炎、心機能異常、他のアントラサイクリン系薬剤等心毒性、本剤
過敏症、骨髄機能抑制死亡例があると書いてあった。塩酸アムルビシン以外の抗がん剤は急
性肺障害、間質性肺炎による死亡例があると書かれ、経験不足の鈴木にはこれ以上の抗がん
剤の併用は自信が無かった。
一方放射線科では、田中の左肺下部の腫瘍に対しての照射の準備が行われていた。肋骨を
避ける為に体の下にクッションを敷いて長時間体勢を維持できるよう、看護師達が田中の体を
動かしていた。そして平田が照射ポイントを的確に合わせようと機械を操作し、時間を掛けて無
事完了した。
すぐに平田と看護師達はその部屋から出て、照射中の被曝を避ける。残された田中は体勢を
維持したまま長時間そのまま耐えなければならなかった。
平田の合図とともに照射が始まった。耐えしのぶ田中は前回に比べると希望があったから、
前よりも苦しくなかった。逆に平田はこれが駄目ならもう田中の命は無いと悲壮な覚悟で、患部
目掛けて放射線を照射していた。
一方、緩和ケア病棟では、鈴木は二クール目の抗がん剤をどう併用するか悩んでいた。前
回の分を減らして、肺がん用の抗がん剤を投与することは確実だが、減らす量で悩んだ。減らし
過ぎればがんは再び増殖して、今までの治療の意味が無くなってしまう。そして逆に減らさなけ
れば抗がん剤の副作用で田中の寿命を縮めることになる。このような状態だから、がん治療が

経験不足の鈴木にはとても判断が下せなかった。
田中の放射線科での治療が終わった。田中は朝の検査もあったことから疲れていて、中々起
き上がることが出来なかった。それで放射線科の看護師は緩和ケア病棟に連絡して、田中を迎
えに来てもらうことにした。
放射線科の連絡を受け、高橋はすぐに看護師二名を移動式ベットと共に放射線科に派遣した。
鈴木は田中の容態を気にして、全体的に投与する抗がん剤を減らすことにした。減らしても症状
が改善しなければまた増やせばいいと鈴木は安易に考え、そう決断した。田中の命に関わる問
題だから安易に考えるべきでは無いが、逆に多く投与して、多過ぎたから減らすというようなこと
が出来ない以上、鈴木の決断は医師としては最善の決断だった。
鈴木は看護師に薬剤部まで薬を貰ってきてもらおうと考えたが、今二名、放射線科に向かって
いて病棟内では人出が足りないことを考えて、自分自身が取りに行くことにした。
看護師達によって田中が病棟に運び込まれ、田中の病室に田中は送られた。その状態は他の
入院患者達から見れば、まるで治療しても治るわけではなく、ただ無意味に寿命を延ばしている
だけに思える光景だった。

第２７話　神田の反対

鈴木が薬剤局に出向き、肺がん用の抗がん剤を入手する。鈴木はそれを持って
急いで緩和ケア病棟に戻る。その間に一人の男性患者によっておかしな空気が緩
和ケア病棟に流れていた。
鈴木は緩和ケア病棟に戻ると即座に田中に抗がん剤を投与する為に、田中の病
室に向かった。
「田中さん、調子はどうですか？」
鈴木は田中にそう挨拶する。
「あ、先生。少しは落ち着いてきました」
と田中は答える。それを聞いて鈴木は安心して
「田中さん、今日から肺への抗がん剤を投与します。今までの分はがんが減りました
から、お薬を減らしますね」
と田中に言った。
「先生、やっぱり肺が悪かったのですね。最近咳がひどくて、もしかして薬が効いてい
ないのかと心配しました」
と田中は不安そうに答えた。
（咳、気付かなかった・・・・・・・・・）
鈴木は肺がんの事に気付いていながら、注意を払わなかったことを後悔した。しかし
今はそんなことを考えていられない、早く田中に抗がん剤を投与して、少しでも多くの
がんを減らさなければならなかった。
「薬を使えば咳も収まりますから、安心していてください」

と鈴木はこの場を取り繕い、田中を安心させた。
「はい、わかりました」
田中は鈴木の言うことを信じて、すべてを任せることにした。
「それではお大事に」
と鈴木は言って病室から離れた。最初の頃から見て、やつれてきている田中を見て、
鈴木は一抹の不安を感じた。
　ナースステーションに戻り、鈴木は高橋に田中への抗がん剤の投与を指示する。それを聞いて高橋は、田中の担当の看護師に指示をした。その指示をされた看護師は
、薬を持って田中の病室に向かい、田中に飲み薬を渡し、これから投与する抗がん剤
を説明し、点滴を始めた。
　病室を出た時に、ふと目の前に患者達の集団が有った。看護師は気にせずにナー
スステーションに戻ろうとしたら、一人の女性患者が話し掛けてきた。
「ねえ、田中さん新薬の実験されてるのでしょ？」
突然の事に看護師は戸惑い、言葉が出なかった。看護師が何も言わないから患者達
はそらやっぱりという顔をする。看護師はあわてて
「新薬の実験って何ですか？この病院はそんなことしません！」
と向きになって否定した。しかし向きになって否定したから、返って噂が本当の事だと
患者達に思われ、事態を余計悪化させていた。
　看護師はこれ以上患者達の相手をしていられないので、そのままナースステーショ
ンに戻った。
看護師はナースステーションに戻ると、すぐに事の次第をチームリ

ーダーである高橋に
報告した。
「い、いったい誰がそんなでたらめを！」
高橋はとんでもないうわさに絶句した。
「どうしたの？」
神田副師長が何が有ったのかと驚いて高橋に聞いてきた。高橋が病院が田中を新薬
の実験に使っているとのうわさが患者達に伝わっていると、神田に伝えた。
「だから、私は反対だったのに・・・・・・」
高橋から事の所載を聞いて神田はそう嘆いた。この嘆きは高橋と報告をした看護師を
不快にした。せっかく鈴木が田中の為に頑張ってるのに、そんな努力を否定するかの
ように、反対していたから。しかし二人は神田には何も言えずその場は黙ったままだっ
た。
神田は直ちにこのことを武田師長に話して、自分の考え道理に進めようとした。神田は
田中の治療は反対していなかった。反対しているのは緩和ケア病棟で治療することで
あった。緩和ケア病棟で治療するということは、今回のような余計な問題まで病棟が被
る事が有るの明白だったからだ。神田的には緩和ケア病棟が時計な負担を背負うこと
には反対だった。

第２８話　冷静な対処

武田は、棟内での噂話に気付かず、師長としての業務をこなしていた。
「武田師長、ちょっとお話が」
そう神田副師長が武田に話し掛ける。
「何でしょうか？」
武田は書類から目を離し、神田の方を見る。
「実は田中さんの治療の件で患者さん達が新薬の人体実験をしていると噂しています」
「噂でしたら、否定すればいいだけです」
武田は噂ぐらいでと、驚き騒ぎもしなかった。緩和ケア病棟は、患者達が当たり前のように死んでいく世界だから、真実のむごさに比べれば噂何かぐらいでと、武田は気にしようとしないのもおかしくなかった。
「しかし、噂といえども、患者さん達に影響が有ります。ここは田中さんを内科に移すべきです。わ、私は田中さんの治療に反対している訳では無いです。田中さんにとっても一番都合のいい場所で治療を受けるべきだと思って言ってます」
神田は、田中の治療に反対している訳ではなく、治療する場所に反対しているのだと改めて武田に言った。しかし武田は
「神田さん、神はここで田中さんを治療させたくて、鈴木先生が田中さんを内科に移動させないようにしています。田中さんも神の意志でここで治療を受けることを望んでます。すべては神の思し召しです。私達が田中さんの事で苦難を受けるのは、

すべて神が望んだ
ことですから、私達が田中さんを内科に移すような逃げる行為は神は望んでいません。私
達がやることは神から与えられた試練を乗り越えることです」
と神田をなだめた。こう言われると神田は何も言うことが出来ず、ただ噂を抑えることを考
える事しか出来なかった。
噂話は少しずつ広まったとはいえ、病院側に何らかの支障が出る訳では無かった。しか
し鈴木の耳に入れない訳にはいかず、高橋が鈴木に噂の事を伝えた。
「何ですって！」
予想外の事に鈴木は驚き落胆した。鈴木は田中の為に治療しているのに患者達にそう思
われているのことにショックを受けた。怒りで震える鈴木に高橋はこれ以上何も言えない。
「ちょっと行ってきます」
とっさに鈴木が怒りを露わにしてナースステーションを飛び出そうとした。
「やめてください！」
高橋が鈴木をあわてて止める。いったい何が有ったのかと看護師達があわてて二人の方
を見る。高橋に止められて思いとどまった鈴木に高橋は
「私達看護師が何とかしますから、先生は田中さんの治療に専念してください」
と必死に訴える。それを聞いて鈴木は、高橋の訴えを断りたくて、心の中で葛藤する。
「鈴木先生、落ち着きなさい！」
武田だった。続けて武田は
「先生、ここの患者さん達はただでさえ精神が不安定なんだから、今のあなたでは逆効果

です。ここは高橋の言う通り、私達看護師に任せてください」
と言って鈴木を止めた。鈴木は武田の言う通りだと、怒りにまかせて動くことを自粛した。
「患者さん達は、死の恐怖で、変な事を思いとんでもないことを口走ったりします。だから医師としてそれを受け止めるのがあなたの仕事なんですよ」
と武田は鈴木を諭す。鈴木はもう武田の言うことに頷くしかなかった。
鈴木は落ち着いて業務に戻り、武田は噂話をこれ以上広がらさせないように高橋に指示を出した。指示を出された高橋はチームのミーティングで他の看護師達と話し合い、患者達に田中の治療について丁寧に説明し、納得してもらうことにした。鈴木も冷静に噂話だと軽く考え、そんな誤解を持たれないように患者達に説明することにした。
一方田中の方は、そんな噂が流れているとは知らずに、ベットで寝ていた。他の患者よりもがんの進行が遅くなったとはいえ、副作用がきつく、出歩くのがきつい状態だった。それで噂話どころか他の患者と話す機会が無く、噂の存在を全く知らなかった。

第２９話　限界

田中の夫は病気で痩せ衰えた妻を見舞う為に、毎日病院に通っていた。今日も仕事が終わると、足早に病院に向かい、妻を見舞った後はまっすぐ家に帰り、食事を済ませて明日の仕事に備えた。

治療開始から二週間目が経過していた。肺がん用の抗がん剤は仕事をしてくれて、田中の腫瘍マーカー値の改善に貢献していた。鈴木は田中の体力を考慮し、抗がん剤の投薬量を減らすことを考えた。しかし投薬量を減らせば、治療が遅れるし、減らし過ぎてがん細胞が増殖し始めれば元の木阿弥である。鈴木は投薬量を減らすのはもっと後の方がいいと決断を遅らすことにした。

田中の夫は今日も妻の見舞いをする為に病院に訪れていた。妻の病室に向かいながら、他の病室の名札を見る。不謹慎だがそれが田中にとって末期がん患者の寿命を知る方法だった。妻はあと何日生きられるか？それが人生最大の心配事であり、治療を受けているとはいえ、それがうまくいくとは限らない。田中の夫は妻がいつまで生きられるか今日も不安であった。

妻の病室に入り、妻と面会する。抗がん剤の影響でやつれていたが昨日と変わらぬ妻が居て、夫は一安心した。妻も今日も夫に会えてうれしそうな顔をした。

「治療はうまくいってそうだね」

夫は妻が昨日と変わらないことに安心してそう言った。妻もそのこ

とをうれしくて
「鈴木先生のおかげです。鈴木先生が治療してくれなかったら私は死んでいたかも知れません」
と夫に語った。夫はそれを聞きながら、妻の髪が抜けてきている異変に気付いた。
緩和ケア病棟は相変わらずの忙しさだった。死期が近い患者達は、ほとんどが看護師の世話
が無いとまともに生活出来ない状態である。だから看護師は常に忙しい状態だった。
鈴木は治療すれば患者達の何人かは生還出来るのではと考え、または生還出来なくても少し
は楽になるのではと、患者達に治療を説いてきた。しかし患者達はあきらめて鈴木の申し出を断
っていた。比較的元気な患者達も、田中の状態を見たら尻ごみして、治療を拒否していた。鈴木は
田中の治療は成果が上がっていると考え、前よりも患者達の説得に力を入れていた。だが肝心の
田中の状態は患者達を納得させる容態では無かった。抗がん剤が田中の活動力を奪い、治療
の成果が無いように思える状態だった。
治療開始から一ヶ月が経ち、鈴木にとって悪夢の選択をする日が来た。
その日は、田中の検査の日で、田中はやつれた体で検査室に向かった。看護師達は忙しくて田
中に付き添う余裕が無かった。鈴木が看護師の代わりに田中に連れ添うと考えたが、鈴木自身も
手が離せず、田中の付き添いは出来なかった。
検査はいつもと変わらなかったが、結果が変わっていた。検査室は田中の数字の変化に何の感
情も持たずに検査結果を鈴木の元に送った。

鈴木は検査室からの田中の検査結果を手が空いてから見た。そこに書いてある数字は田中の病状の悪化を示していた。

（どういうことだ・・・・・・・・・・・）

鈴木にはがん細胞が増殖する理由が見当たらない。鈴木は検査の数字が間違っているのではないかと、慌てて検査室に電話しようとした。しかし受話器を持ったところで踏みとどまった。鈴木には思い当たる節が有った。田中の体力の低下による免疫力の低下だった。免疫力の低下ががん細胞を殺す量を減らし、総合的にがん細胞の増殖を抑えられなくなっていた。

その頃、放射線科の平田も田中のＣＴ画像を見て憂鬱になっていた。

（減らしても次から次へと・・・・・・・・・・）

放射線で次々とがんの病巣を潰しても、新たながんの病巣が湧いてきていた。そして田中の放射線被曝量は限界に達していた。

第三十話　治療の中止

鈴木は、治療がもう効果が無いということで打つ手なく窮していた。
「鈴木先生、放射線科からお電話です」
看護師がそう言って鈴木を呼ぶ。鈴木はあわてて看護師から受話器を受け取った。
「はい、鈴木です」
「平田だが、ちょっと放射線科に来てもらえないですか」
「分かりました、すぐ行きます」
そう言って鈴木は電話を切り、放射線科に向かった。途中、鈴木は田中を治したい一心で、
無意識に希望を持ちたくなり、平田からの呼び出しを新しい治療方法の相談だと勝手に思
い込み、期待で次第に胸を膨らませていった。
鈴木は放射線科に辿り着き、すぐに中に入った。
「鈴木です。ご用件は？」
鈴木は平田を見るなり、そう言った。平田は田中の肺のＣＴ画像を見ながら
「腫瘍が次々と現れて来ている。抗がん剤は効果が無かったようだ」と失意に語る。
「こ、これは・・・・・・・・・」
鈴木はＣＴの画像を見て現実を知る。しかし、事態を受け入れ難く、現実を素直に受け入れ
られない。
「ＣＴでも分からなかった部分が、増殖して肥大したのがいくつかある。これからも同じものが
増え続けるだろう」
平田は冷静に田中への死刑宣告を鈴木に伝える。鈴木は死刑宣告を

聞いて、取り乱しなが
ら
「小さいなら放射線を当てればすぐじゃないですか？抗がん剤も新しいのに変えます！治療すれば回復するレベルですよ」
と必死に食い下がる。しかし平田は
「放射線は照射量がもう限界だ。これからは痛みを減らす緩和ケアの治療しか行えない」
と鈴木にあきらめを即す。しかし鈴木は
「緩和ケアの分を治療に当ててください。抗がん剤は新しいのに変えますから！」
とあきらめないで平田に食い下がる。
「緩和ケアの分では全く治療にならない。悪いが致死量にまで到達した以上、もう放射線治療はあきらめるしかない」
と平田は最後の説得をした。それを聞いて鈴木はショックで今にも崩れそうだった。
「分かりました。治療はあきらめます」
鈴木は少し考えて、やっと苦渋の決断をした。平田はそんな鈴木にかけてやる言葉が無くただ黙っていた。
　放射線治療を拒絶された鈴木にはもう田中を救う方法が無く、田中の治療をあきらめて放射線科を出た。鈴木はもう緩和ケア病棟に向かう意欲が無いほど足取りが重く、ゆっくり緩和ケア病棟に向かって行った。
　病棟は鈴木の事などまったくお構いなしに、看護師達が動き回っていた。鈴木はその動きに混ざろうとせずに静かに席に付いた。看護師達は鈴木の事など考えずにただひたすら患者の

事を考えて、鈴木に受け持ちの患者の話をして、指示を仰ごうとした。鈴木も患者は田中だけ
ではなく病棟全体の人達だと思い、田中の事を頭から離して、看護師達に指示を出した。鈴木
は田中の事を忘れようとして、この場では冷静に判断することが出来た。しかし、いつまでも忘
れている訳にはいかず、少しずつ気持ちは沈んでいった。
放射線科から戻ってきた鈴木の態度が暗くなっていくのを看護師達が感じ取り、病棟内自
体も暗くなり始めていた。このことに関して看護師達は対策として、いつもの事であるという“
慣れ”で対応していった。
鈴木は苦渋の決断で、田中の治療を止めることにした。ただそれを直接田中に言うには気
が重すぎた。それで田中には田中の夫から伝えることにして、田中の夫が来院した時に話す
ことにして、まずは高坂内科部長に報告することにした。
鈴木は内科部長室に向かった。先程よりは落ち着きを取り戻してきたから、少しは歩くスピ
ードが戻っていた。しかし、それは鈴木にとって田中の運命を軽く考えていると罪悪感を感じ
るものだった。
内科部長室に辿り着き、鈴木はノックして部長室に入った。高坂は事務作業をしながら鈴木
の方を見た。
「部長、田中さんの治療の件ですが、効果が無かったので断念します」
突然の事で、高坂は驚いたが、田中が末期がんの患者であることを考えれば、驚くほどの事
でも無く鈴木に

「それでどうするつもりだ？」
と聞いた。その問いに鈴木は
「このまま緩和ケア病棟で緩和ケアをして余生を送ってもらいます」
と淡々に答えた。それを聞いて高坂はちょっと考え
「田中さんへの治療はまったく無駄では無いだろ。それはそれで緩和ケアとして有効な方法だったかもしれないじゃないか！だから効果が無いからと止めるのは、少し早計ではないか？」
と言って鈴木の考えを否定した。それに対して鈴木は
「しかし、田中さんの体は限界で、もう放射線治療も受けられません。これ以上治療は無理です」
と鈴木は先ほどとは打って変わって力強く否定した。

第３１話　賢明な判断

高坂は鈴木の田中に対する治療への否定の意志を受け止め、少し考えてから
「判断は君に任せる。田中さんの治療を続ける気になったら、また報告してくれ」
と言った。鈴木はそれを聞いて
「はい、その時は報告します。ではそれでは失礼します」
と言って内科部長室を出た。
鈴木は病棟に戻りながら、今度は田中の夫への治療の断念に付いて話す為の心
の準備を始めた。
鈴木は病棟に辿り着いて、まず武田師長に
「田中さんの件でお話が」
と武田に話し掛けた。武田はすぐに手を止め
「どうしたの？」
と言って話を聞く準備をした。それを見て鈴木は
「実は田中さんへの治療はこれ以上継続しても効果が無いので、治療を中止するこ
とにしました」
と言った。それを聞いて武田は
「そうですか。鈴木先生がそう思うなら仕方ないですね。で、これからはどうするつもり
ですか？」
と鈴木に問い掛けた。鈴木はその問いに
「治療はもう意味が無いですから、これからは緩和ケアを行います」
と言った。
「そう、それなら担当看護師にそう指示しときます」
「色々すみませんでした」

そう言って鈴木は武田に頭を下げた。この光景を見て神田は少しほっとした。ここは緩和ケア病棟であるから、治療はお門違いで病棟の雰囲気を壊すものだと思っていた。神田も治療で治るなら、治療は大いに受け入れるが、治らない治療で患者達が無意味な希望を持ち、看護師達に迷惑な振舞いを起こされたら業務に支障をきたすと、過度に考えていた。反面、」武田は残念に思っていた。治療がすべてに於いて何の意味も無く終わったので、せめて何らかの進歩が有ればよかったのにと残念がった。

武田は田中の看護担当チームのチームリーダーの高橋に、田中の件を伝えた。高橋は治療中止は受け入れたく無かったが、鈴木がそう判断したのだからと仕方なく受け入れた。こうして田中の件に関しては、病院側は治療をやめて緩和ケアで対処することになった。

鈴木が田中の治療の後始末的な事をしている時に麻酔科の坂本が鈴木の元にやってきた。坂本は鈴木を見て

「田中さんの件は聞いたよ。治療をやめて正解だ。無駄に延命しても田中さんがただ苦しい思いをするだけだからな。この件に関してはお前の判断は間違っていない。後は俺に任せろ。麻酔で痛みを緩和させて楽にしてやるから」

と坂本なりの励ましの言葉を鈴木に与えた。そんな励ましの言葉だが、治療をあきらめた鈴木には、それなりに心地よく聞こえていた。

夕方になり、昼勤の看護師達は準夜勤の看護師達に引き継ぎをして帰り仕度を始めた。鈴木はこれから田中のお見舞いに来る田中の夫に話をしなければならないから、そのままナースステーションに待機していた。

しばらくして田中の夫がいつもと変わらぬ感じで、緩和ケア病棟に田中を見舞いにやって来た。それに気付いた看護師がすぐに田中の夫を呼び止め、鈴木から話が有ると田中の夫を病棟のカンファレンス室に案内した。田中の夫はカンファレンス室の椅子に座り、じっと鈴木が来るのを待った。

「お待たせしました」

そう言って鈴木がカンファレンス室に入ってきた。田中の夫はどんな用事かと鈴木の顔を見た。鈴木は椅子に座るなり深刻な顔をして

「奥様の事ですが、精一杯頑張って治療してきましたが、これ以上改善の見込みが無いので、申し訳ないですがこれで治療を止めさせていただきます。」と言った。それを聞いて田中の夫はやはりと感じて無言だった。続けて鈴木は

「治療は中断しますが緩和ケアは続けますので、このまま普通に入院のままですから、今と変わらずで何も心配はいりませんから安心してください」

と語った。田中の夫はこのことを予期していたのか、別に落胆する訳でもなく静かに

「そうですよね。敏江ももう治らないと分かっています。だけどここまで長生き出来たのは鈴木先生のおかげだと私共々感謝しております。今まで本当にありがとうございました」

と鈴木に礼を言った。鈴木は田中の夫に礼を言われても、喜べるような結果ではなく、ただ
黙るしかなかった。そんな中、田中の夫が深刻に
「先生、治療を続けてもらえないでしょうか？」
と鈴木に頼んだ。突然の事で鈴木はどうすればいいかわからず答えようがなかった。

第３２話　熱い気持ち

突然の田中の夫の頼みに鈴木は困惑して、どう答えていいかわからなかった。
鈴木はあわてて
「説明が不十分でしたのでもう一度言います。田中さん、奥さんはもう治療しても治る
見込みは有りません。これ以上治療しても無駄なので緩和ケアに切り替えるべきだと
思うのですが、それでよろしいでしょうか？」
と新たに田中の夫に問い掛ける。田中の夫はそれを聞いて深刻な顔をして
「治療がもう効果が無いのは私も妻も分かっております。妻も前と違ってもう死ぬ覚悟
が出来ています。ただ夫婦として少しでも長く一緒に居たいと二人で話し合いました。
だからもう治らなくてもいい！一緒に居られる時間が長くなるならこのまま治療を続け
て貰おう。そう二人で決めました。だから先生どうか治療を続けてください」
と鈴木に訴えた。それを聞いて鈴木は田中の治療を続けようかと思い始めたが、治療
を中止するという判断が医師として余りにも賢明だから、どうしていいかわからず、二つ
の気持ちに引っ張られて心が苦しくなった。
　何も言えない鈴木に対して田中の夫は、鈴木に申し訳ないと思いながら
「神様の意志に逆らって長く生きようとするのだから、私達夫婦は死んだら地獄に行くで

しょう。先生も私達に協力したら地獄行きですから、とても協力なんか出来ないと思いま
す。だから無理にとは言いません」
と語る。鈴木は無神論者だが、このキリスト教系の聖マリアンヌ病院に勤めていれば、
神の存在を信じ込まざるを得なくなる。ただ地獄までは信じ切れず
「治療して寿命を延ばしたからって、地獄に落ちないでしょ。神様もそこまで冷たく無い
ですよ。ただ治療は絶対出来ないという訳じゃないですから、治療を継続がお望みなら治
療を続けることは可能ですけど」
と軽く答えた。それを聞いた田中の夫は感激し
「お、お願いします。これで敏江も喜びます。神様はこんなことを許してくれないでしょうが
、私達だって人間として幸せに生きていきたいです。ほんと私達には先生が神様です！」
と力強く訴えた。鈴木は田中の夫に神様扱いされて苦笑しながら
「分かりました。田中さんの御希望なら治療を続けます。ただ治療したからといって、治る
訳ではありませんので、そのことを理解してください」
と言った。
「分かっています。ただ敏江が長く生きてくれて二人で居られる時間を作れるだけでいいの
ですから」
「ではお話はこの辺で」
「はい、先生ありがとうございます」
話が終わり、鈴木はドアを開けて、先に田中の夫からカンファレンス室を出て貰った。田中
の夫は嬉しそうに歩きながら田中の入院している病室に向かって行った。鈴木はその後ろ

姿を見ながら、例え延ばせても一ヶ月ぐらいなのにと感じていた。
時が経ち、見舞いを終えた田中の夫がナースステーションの窓越しに、鈴木に対して嬉しそうに挨拶をして帰って行った。それを見届けた鈴木は自分も帰ることにして、身の周りの片付けをして、準夜勤の看護師達に挨拶してナースステーションを出た。
帰りながら鈴木は、田中の治療再開に付いて自問自答していた。
（俺は医者だろ！治らないと分かっていて治療などしていいのか？今治療したらただ苦しませるだけだ。治療しても苦しい思いをさせるだけなら、治療しないほうがいい！！）
鈴木は田中の夫に治療を再開する約束をしたのを後悔した。
（だったら医者は何の為に存在するのだ？いくら患者さんを治そうが人はいつか死ぬ。医者はただ寿命を延ばしているにすぎない！）
鈴木は医者の存在価値を必死に模索する。
（しかし、寿命を延ばすことが人々の幸せになるなら、俺は医者として寿命を延ばすことに全力を尽くすべきではないのか？）
鈴木は医者の使命として、田中の治療を肯定し始めていた。
「俺は間違っていた。俺のすることは最後まで全力を尽くすことだった」
鈴木は声に出して、心から湧きあがる熱い気持ちを自分自身に伝えていた。

第３３話　新しい治療方針

次の日の朝、鈴木は緩和ケア病棟に入り、田中の治療の指示書を作成した。そして田中の治療方針を新たに担当の看護師に伝えた。看護師は指示書を鈴木から受け取り、それに目を通した。

（あれ、抗がん剤の投与の項目がまだある？）

看護師は田中の治療を止めたことを聞いていたので、抗がん剤の部分に違和感を感じたが、そこは医療の都合とかもあって看護師が口を出すレベルでは無いと思い、そのまま受け取ることにした。

武田師長がナースステーションに入って来た。鈴木はすぐに武田に声を掛けた。

「武田師長、お話が」

「はい、何でしょうか？」

「実は田中さんの御主人さんと話し合って、田中さんの治療を継続することにしました」

「え、それで治療して回復の見込みが有るのですか？」

「いや、ただの延命治療です」

「あら、そうですか、それなら治療に頑張ってください。担当には後で伝えときます」

「それではよろしくお願いします」

と言って鈴木と武田は分かれてそれぞれの業務に戻った。

「武田師長、田中さんの治療には私は反対です！」

鈴木が離れてから神田副師長が武田に田中の治療に反対してきた。

「え、どうしてですか？」

武田が神田に問い質す。

「師長、ここは緩和ケア病棟です。本格的に延命治療をするならば内科病棟に移ってもらうべきです」
神田がそう答える。それを聞いて武田は
「神田さん、鈴木先生がどうなさろうと私達は緩和ケアをやるだけです。それに鈴木先生の努力が新しい緩和ケアの方法を発見することになります。今までの方法を継続しても、改善は有ってもも進歩が有りません。医療は新しいことに挑戦しない限り、いつまで経っても進歩が無く、それが患者さんにとって大きな負担をもたらすことになります。私達看護師がすべきことは、鈴木先生が新しい緩和ケアの方法を発見できるように協力することじゃないでしょうか？」
と返した。その武田の真意に神田は否定する事柄も無く、ただ納得して
「確かに師長の言う通りです」
と言った。
「分かってもらえたなら、私達は看護師としてお互い田中さんの為に頑張りましょう」
「はい、頑張ります」
武田と神田は田中の為に看護師として鈴木に協力することに同意した。
　高橋は田中の看護計画の見直しをして田中の担当の看護師に指示を出そうとした。しかし田中の担当の看護師から、逆に鈴木からの指示書を受け取り、内容を見て驚いた。
「武田師長、田中さんの看護の件ですが」
慌てて高橋は武田に田中の看護の事で問い質した。
「ああ、田中さんなら治療を継続することになりました」

武田はそっけなく答える。
「本当ですか！良かったぁ」
治療継続と聞いて高橋は喜んだ。
「残念だけど単なる延命治療よ。いまさらどんな治療をしようともう治りませんから」
喜んだ高橋に釘を刺すように、冷酷に武田は言った。それを聞いて高橋は顔を曇らせ落ち込み
出した。
「高橋さん、治らないからと言って看護は終わる訳ではありません。これからは鈴木先生を助け
ながら新しい緩和ケアを構築しなければなりません。色々試行錯誤をしなければなりませんが、
チームリーダーとして実力を最大限に発揮して、田中さんの緩和ケアを行ってください！」
武田はそう言って師長としての業務に戻った。高橋は新しい緩和ケアと武田に言われて戸惑っ
たままだった。新しい緩和ケアと言っても抗がん剤を投与してもしなくても症状は同じになるだろ
うしで、それに対応する緩和ケアは変わらず同じである。違うのは症状の発生時期、期間ぐらい
だから、高橋は武田の真意が何であるか分からなかった。
　高橋は武田の真意が分からないまま、田中の看護計画の見直しを再度することになった。しか
し高橋のチームの受け持っている患者は田中だけでは無いので、田中だけに貴重な時間を割く
訳にはいかなかった。それですぐには見直しに取りかかる時間が無く、高橋は前回のままの状
態で田中の緩和ケアをすることにした。
　一通りの患者への指示を看護師達に出した後、鈴木は田中の治療方法を真剣に考えていた。

延命治療と言ってもただ延命すればいい訳では無かった。夫婦生活、すなわち夫婦としての対話
が出来ることが望ましく、例え体が動かせなくなっても意識と会話が出来れば延命の意味が有る
と鈴木は考えた。それで鈴木は肺がんの治療に力を入れることにした。息が出来なくては会話す
らおぼつかない。呼吸器の確保、鈴木はそれを重点的に考え田中の治療をすることにした。

第３４話　坂本の説得

田中の延命治療がスタートしたが、田中への治療方法はさほど変わらず、変わったのは投薬量ぐらいだった。
麻酔科の坂本は田中への治療が再開されたことを看護師から聞いて驚いた。すぐに鈴木に真意を問い質そうと思ったが、肝心の鈴木は席を外していた。それで坂本は田中に直接話を聞こうと田中の病室に向かった。
コンコン、ドアを叩いて坂本は田中の病室のドアを開いた。坂本はすぐに田中のベットの元へ行き
「田中さん、お体の調子はどうですか？」
と聞いた。その問いに田中は
「ええ、今は痛みが治まってて大丈夫です」
と麻酔科の坂本向けに痛みの事を語った。
「田中さん、延命治療をするって田中さんの本心ですか？本心で無かったら私が鈴木に言ってすぐに止めさせますよ！」
坂本は延命治療が田中の本意ではないと思い、田中の真意を問い質した。その問いに田中は
「治療は私が鈴木先生にお願いしました」
と坂本に言った。坂本はそれを信じられないという感じで
「田中さん、延命とはどういうことかわかりますか？今の苦しみがずっと続くのですよ。今は小康状態でも、そのうち殺してくれと思うくらいひどい状態になる時が有ります。その時は私

達医師でもすぐにはどうにもすることが出来ません。それでもいいのですか？」
と田中に訴えた。田中は坂本の言いたいことが痛いほど分かるが、それでも長く生きたいと
思う気持ちが強く、返答に苦しみながら
「坂本先生の言ってることは分かります。それでも私は長く生きたいです」
とか弱く訴えた。その田中からの返答に戸惑いながら坂本は
「そうですか。では私も出来る限りのことをしますが、完全に痛みを無くすことは出来ないので
、早く死を迎えたくなったら、私か鈴木にでも言ってください。すぐにでも治療を止めますから」
と語り田中の病室を出た。
　坂本はもう田中本人に言っても無駄だと思い、足早にナースステーションに向かった。
　ナースステーションに入り、鈴木を見つけるとすぐに
「鈴木君、田中さんの事だが」
と鈴木に話し掛けた。
「え、何でしょうか？」
坂本に呼ばれて鈴木は坂本の方を向く。
「君、田中さんの治療を継続するそうだね？」
「はい、本人達がどうしても続けて欲しいということなので」
「本人がそう言ったって、治療したって治らないのだから、医者として中止すべきではないのか？」
坂本は鈴木に田中の治療をやめるように問い掛ける。しかし鈴木は
「確かに治療しても治らないレベルですが、生きていられる時間は増やせます」
その鈴木の返答に驚きながらも坂本は

「生きていられる時間って、その分苦しみが増えるということなんだぞ！それを本人達に説明したのか？」
と鈴木に問い質した。
「はい、そのことはちゃんと説明しました。しかし田中さん夫婦はそれでも夫婦としての時間が欲しいということなので、僕は田中さんの治療を継続することにしました」
そう言って鈴木は坂本の問いに答えた。それを聞いて坂本は呆れながら
「本人がどうしてもというなら仕方が無い。しかし、医者なら患者の為に常に最善の選択をしてやらないと、後悔するのはお前なんだからな」
と半ばあきらめ顔で鈴木に言って鈴木の元を離れた。
（長く生きて貰うことが最善かわからない。だけど俺は長く生きて貰えるように努力するしかない）
鈴木は坂本の説得に揺れ動いた心を、そう思い動揺を止めた。
　日が経ち、田中に抗がん剤の副作用が出てきた。頭髪が抜け落ちてきたのだった。高橋は田中の担当の看護師から報告を受けて、すぐに頭皮を保護するように指示した。看護師はガーゼで頭を包み、ネットをかぶせて頭皮を保護した。しかし副作用は止まらないから少しずつ頭髪は抜け落ちて、丸坊主になった。
　そして副作用だけではなく、がんが全身に転移している為、がんによる障害も始まった。

第３５話　田中の死

がんの進行が著しく進み始めて、田中の腹部が膨らみ始めた。鈴木は腹部を触り、腹水と判断してコルチコルステイドの投与を指示し、腹腔穿刺をすることにした。

鈴木は穿刺場所を腹部超音波検査で調べ、腸管や実質臓器に刺してそれらに傷を付けないように穿刺した。穿刺後は時間を掛けてゆっくりと腹水を抜いた。緩和ケア病棟なら利尿剤での治療を優先するが、今回は即効の効果を必要としていた為腹腔穿刺で腹水を抜くことにした。当然腹腔穿刺の機材は緩和ケア病棟には置いて無かった為、看護師達が内科病棟から借りて来て、使用していた。

穿刺後、看護師達は田中の負担を軽くする為にファーラー位にして足を屈曲させ、離被架を使用して寝具による圧迫を取り除いた。腹腔穿刺は一度抜いてもまた同じ所に溜まるから、実質無意味でまた溜まれば同じことをしなければならなかった。それは看護師達の負担に繋がるから、神田副師長は腹腔穿刺には反対だった。しかし、武田師長に看護師達にそういう経験を積ませとくことの重要性を説明され、しぶしぶ納得していた。

鈴木は田中の体力を考え、少しずつ抗がん剤を減らしていった。ゆえに抗がん剤の副作用は徐々に治まって行ったが、それに反比例してがんの進行は進んでいった。田中の

体は抗がん剤を減らしていくごとに、他の患者達と同じ状態になって行き、死期が近づいていくことがはっきりと分かった。それは素人目には本当に治療をしているのか疑わしい状態であった。それでも田中の夫は鈴木を信じて、死が近付いている妻との時間を増やすように努力していた。

そしてついに田中の命が終わる時が来た。緩和ケア病棟はＩＣＵ（集中治療室）が無いから、田中はそのままベットで昏睡状態になった。鈴木はすぐに看護師に田中の夫へ連絡することを伝え、田中の側に付いて、少しでも長く生きられるように祈った。しかしその行為もむなしく、田中は静かに息を引き取った。

鈴木は田中の死を少しずつ受け入れるように脈拍などの生死の確認をした。そして

「田中さんはお亡くなりになられました」

と側にいる看護師達に伝えるように言った。後は看護師達が田中の遺体を丁寧に扱い、霊安室に運ぶ準備を始めた。鈴木はナースステーションに向かって、田中の死亡診断書を書く準備をした。

鈴木がナースステーションに入ってきた時、中に居た看護師達は鈴木を見た時点で田中が死んだのを悟った。当然鈴木には田中の事は口が裂けても問うことは出来なかった。

鈴木は一人静かに田中の死亡診断書を書き出した。

（俺は結局田中さんを助けることは出来なかった・・・・・・・・・・、ただいたずらに時間を引き延ばして、苦しい思いをさせ続けただけじゃないか！あの時俺が田

中さんを説得していれ
ば田中さんはこんなに栗しい思いをしなくて済んだのに・・・・・・・・・・・・・・）
鈴木は書きながら、今までの努力は何だったのかと一人自問自答した。
田中の夫があわてて第十四病棟に入って来た。そして受付で田中の事を聞き、がっくりうなだれた。そして看護師に付き添われて霊安室に向かった。鈴木はその場に居なかったので、田中の夫に声を掛けることすら出来なかった。
霊安室では田中の夫が安らかに眠る妻を見つめ静かに顔を覆う白い布を取った。そして息をしないで安らかに眠る衰弱した妻を見て、泣き崩れた。付き添いの看護師はただそれを見守るだけだった。
田中の夫は看護師を気遣い、妻の遺体から離れ
「すみません、病棟に戻りましょう」
と言って霊安室を出た。
田中の夫が病棟に戻ると鈴木がすぐに田中の夫に気付いて、慌てて側に寄り
「この度は自分の力が至らなくて申し訳ございません」
と謝った。
「そんな、頭を下げないで下さいよ。妻は鈴木先生に出会えてよかったと言ってました。そして二人のわがままを聞いてくださってありがとうございました」
そう言って田中の夫は深々と礼をした。その行為は鈴木の心に鋭く突き刺さった。
田中が死んだので、田中の夫は葬儀の準備で忙しく、鈴木も受け持ちの患者で無くなったから、二人は離れ、それぞれのするべきことに戻った。

第３６話　神々への抵抗

夕方になった。一日の業務を済ませた鈴木は田中を亡くしたショックから、精神的に疲れていた。
日勤の看護師達は田中の死に関する気持ちを日常的な出来事に切り替えて、ショックを抑えながら帰宅していく。鈴木は医師として、同じように心を切り替えなければならなかったが、思いの強さが切り替えを拒絶していた。
鈴木は準夜勤の看護師達に挨拶して、何も無かったように普通に進行するナースステーションを後にした。
外は雨が激しく降り続いていた。鈴木は繁華街の安い居酒屋で一人酒を飲んでいた。精神的に参っている為、目はうつろで暗く落ち込んだままだった。
「親父、勘定」
「へい！えーと三千五百円です」
鈴木は居酒屋で酒を浴びるように飲み、代金を支払って店を出た。
「ちょっとお客さん傘忘れてますよ！」
店主は鈴木の出て行った玄関に向かってそう言う。
「まあ、この雨ならすぐに取りに来るだろう」
店主は鈴木があわてて傘を取りに来ると思い、そのまま店のカウンターに戻った。
鈴木は雨に濡れながら、ふらふら歩きながら家に向かって歩いていた。そして公園の大きな木の下にへたり込んだ。
激しく雨が降り、雷が鳴る中、鈴木は突然笑い出した。
「ふはははははははっ！」
「神よ！お前が人の命の長さを決めるというなら、俺はお前に逆ら

って少しでも多くの人を助けてや
る！」
と鈴木は天に顔を向けてそう絶叫した。そして笑いながら
「神よ、俺が邪魔だと思うなら殺せ、今ここで殺してみろ！」
と開き直って神々に逆らうことをここに宣言した。しかし神はそれ
を無視するかのようにただ雨と雷
を続けるだけだった。
「こんなことをしていられない、早く帰って少しでも多くの命を助
けなければ」
鈴木は何もしない神を無視するように、重たい体を気力で立ち上が
り、帰途に付いた。
次の日の朝、第十四病棟はいつものミサから始まっていた。
「田中さんは昨日天国に向かわれました。皆さんも天国に行けるよ
うに神様にお祈りしましょう」
修道長がミサに参加する患者達にそう訴える。患者達は修道長に言
われるまま神に祈りをささげ
ていた。
ミサが終了すると鈴木が患者全員に呼び掛け、話を聞いてもらう
ことにした。
鈴木に言われるまま患者達は残り、鈴木の話を聞くことにした。
「皆さんに言いたいことは」
そう言って鈴木は患者達に力強く訴える。
「少しでも長く生きたいと思う方は手を挙げてください。その方は
私が治療します。治療すれば今よ
りも長く生きることが出来るのです。我こそはと思う方は手を挙げ
てください！」
鈴木は治療の応募者をミサの参加者から募った。しかしそこに集ま
った患者達は延命治療した田
中が治療の意味無く死んでいったのを知っているから、誰も手を上
げようとしなかった。

「はい！」
一人だけ元気よく手を上げる者が居た。鈴木はその人物を見て驚いた。野村隆だった。
「隆君！」
鈴木は驚いて野村隆の名を呼ぶが、次の言葉がすぐには出てこなかった。
「先生、僕を治療してください。僕じゃ駄目ですか？」
隆はそう鈴木に言う。鈴木は隆に言われて慌てて冷静さを取り戻し
「皆さん、僕の話はこれで終わりです。お帰りになられて結構ですから、気を付けてお帰りください」
鈴木はそうみんなに呼び掛け、患者達は揃って席を立ち、病室に戻り出した。
「隆君、君はまだ未成年だから君の一存では治療を決められない。だから治療にはご両親の承諾
が必要なんだよ」
鈴木は冷静に治療の事で隆の両親とトラブルになるのを防ぐために、隆に治療には隆の両親の承
諾が必要な事を諭した。
「分かりました、お父さんとお母さんに相談します。それと先生！」
隆が鈴木に呼び掛ける。
「何かな？」
鈴木が隆に聞く。
「先生、僕を治療できるようになったら、僕が死んだあと解剖して欲しいんだ」
隆はそう明るく話す。
「か、解剖って・・・・・・・」
突然解剖と言われて鈴木が驚く。
「僕を解剖して治療の効果を調べて、今後の他の人達の治療に役に立てたいんだ」
そう隆が解剖の意味を説明する。鈴木は解剖の理由を知ってまた驚

き声が出なかった。

第３７話　隆の思い（前書き）

パソコンが壊れて執筆中の部分を喪失してこんなに遅くなりました。

第３７話　隆の思い

野村隆の病名は骨肉種だった。骨肉種とは骨の中に肉の塊の腫瘍が出来て、それが大きくなるにつれて骨を圧迫して、最終的には骨を壊して外に出るくらい肉腫は大きくなる。治療方法は主に切断で患部を切って他への転移を防いでいる。ただ隆は骨盤内に肉腫が出来て、切断による腫瘍の除去が出来なくて、化学治療と放射線治療を続けていたが、若さゆえに腫瘍の成長が早く、転移を防ぎきれず、治療を断念して緩和ケア病棟に移ることになった。

鈴木は隆の置かれている状況がわかっていたから、少しでも幸せな人生を過ごして欲しいと思っていたから、痛みを続ける治療とその後の解剖などというおぞましいことを素直に受け入れることは出来なかった。

「それも御両親に相談してもらえないかな。君が解剖をして欲しいと思っても僕が君を解剖したいと思っても、御両親が認めない限り、そんなことは絶対出来ないから。医者だからといってどんなことも出来るわけでは無いからね」

鈴木は隆を思いとどまらせようと、冷静に隆を諭そうとした。

「じゃ、わかりました。すべて両親に相談すればいいのですね。それでは相談して改めて先生に報告します」

隆は鈴木の真意を知らずして、無邪気に鈴木の説明を受けて両親に相談することにした。

隆は病室に戻り、鈴木は業務に戻った。鈴木は椅子に座り、隆のカルテを見直した。カルテにはがんの進行が早く、これ以上の治療は無意味と担当医の診断が書かれていた。担当医も放射線治療、抗がん剤の投与と頑張ってきたが、がんの進行が早く、抗がん剤も徐々に効き目が悪くなっていくから、治療も進行を止めるから、ただ単に遅らせるだけになっていった。このことは鈴木も田中で体験しているから、担当医のことを責める気は無く、心の中で新たな治療

方法を模索した。
　八時を過ぎて隆の両親が見舞いに来た。両親は大事な一人息子を失うという事実を忘れ、ひたすら息子を元気づけることだけ考えて、隆に会った。隆も両親の気持ちに応えようと二人に
「お父さんお母さん、頼みがあるのだけど」
「何だ隆言ってごらん？」
父親は出来るだけ願い事を叶えてやろうと、やさしく問い掛けた。
「僕、治療を受けたいんだ。治療を受けて少しでも長生きしたくて」
隆は夢を語る少年のように、父親に治療をねだった。その予想外のおねだりに父親は戸惑いながら
「治療か、治療してもただ苦しむだけだぞ、それにこの病室で出来るだけ苦しまないようにしてもらうことで、ここに来たのだから、今更治療はどうかなとお父さんは思うよ」
とやんわりと治療を受けたいと思う隆の気持ちを否定した。
「違うよお父さん。僕が治療を受けるのは医学の為なんだ。僕を研究に使ってもらって医学を進歩させて欲しいんだ」
隆はこういう意味なんだと父を説得しようとする。
「隆！、研究だなんてあなたを実験動物みたいなことをさせるわけないでしょ！」
隆の説明を聞いて隆の母親が隆を叱る。父も
「隆、お母さんと同じでお父さんも隆を実験動物みたいな扱いなんかにしないから。そんなことを言い出したのはどの先生だ？怒らないから教えてなさい」
と隆の願いを聞き入れようとしなかった。
「お父さんお母さん、僕はこのまま死んでいいの？僕は死ぬ前に誰かの役に立って死にたい！僕は研究に使ってもらって医学を進歩させて、僕と同じ病気になった誰かを助けたい。これが僕がこの世に生まれた意味なんだ！」
と泣きながら両親に訴えた。それを聞いて両親達は声が出ない。二人とも隆にこのまま死んで欲しくない。かといって研究とかに隆を

使って欲しくない、その葛藤が二人を黙らせた。
　長い沈黙の後、隆の父親が
「わかった、治療してもらおう。その代わり実験ではなくて生きる為の治療だ。がんを治す為ならお父さんは隆の為に先生に治療して貰えるように頼もう。隆も実験ではなく生きる為だけに治療を受けることをで納得してくれ」
と隆に回答した。生きる為ならばと母親も父の考えを否定しない。
隆は
「お父さんありがとう」
と喜んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3774h/

神々に反旗を

2011年10月16日20時54分発行